
椿！(仮)

山子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

椿！（仮）

【Nコード】

N3415Q

【作者名】

山子

【あらすじ】

仁科椿、17歳、高校1年。

ワケ合って1年遅れて女子高生始めました

妖艶な生徒会長

パワフルな不良たち

仲の良い女友達

たくさんの――愛をありがとう

最後の恋をしよう――

ワケ有り地味系、平凡女子が高校に入学。気の合う友達、怖く怪しいも優しい人たち（不良含）に出会う・・・

本編を読む前に

『椿！（仮）』に来てくださりありがとうございます。

執筆遅ですが、頑張つて書いていきますので、よろしくお願い致します。

この作品は、魔法の？らんどというサイトで主に書いている小説です。

更新速度は、こちらが主になりますので、遅いと思われます。

早く読ませろ！という素敵な方は、

<http://ip.tosp.co.jp/BK/TosBK100.asp?I=hachirin&BookId=1>
にて、お読み下さい。

この作品は、ストーリー上、教育によろしくない、未成年による飲酒・喫煙・性描写・暴力描写が、予告もなく書かれる恐れがあります。

ご了承下さい。

著者は、まったくもって、これらを推奨しているのではなく、ストーリー上、話の展開的に必要という事を理解して下さい。

お楽しみ下さいますと嬉しいです！！！！

感想やレビューとかくださいますと書く活力となります！！！！

早速のお気に入り登録ありがとうございます！！！！

では、お楽しみください。。。

001（前書き）

突然の喫煙、飲酒、性、暴力描写など出てくる恐れがあります。
ストーリー上の表現であり、作者は決して推奨しているわけでは
ありません。
基本ラブコメ、時々シリアスです。

新しい教室は新1年生たちが、どこかソワソワとした雰囲気を出していた。

私は自分に指定された席に座り、その様子を眺めていた。

新しいクラスメートたち。

友達同士で入学したのか、既に何グループが出来ていて楽しそうにお喋りをしている。

男女共、一般的な高校生的ファッションの中、私のファッションといたらサイドが長めの真っ黒なショートボブに学校指定キッチリの制服を着用。

ちょっと、イマドキから外れている気がないでもない。

けど、私の斜め前に座る彼女も大概だと思う。

後ろから見る限りだが、肩甲骨辺りまであるピンク系金髪に、毛先だけがクルクルとカールしているのが可愛い。

改造された制服…あれを自分で弄ったというのなら彼女は裁縫の腕はかなりのものだ。

チラチラ覗く爪はキラキラと光っているし、顔は見えていないけど、電話で話している声は意外とハスキーで、キレイ系なのかもしれない。

どうも彼女は、ヤンキー系女子高生らしい。
チャラい系女子高生とは、また違った雰囲気だ。
ちなみに私は、真面目系に分類されると思う。

顔が見てみたい。

だけど、私という人間は、内側では雄弁に言葉の嵐が吹き荒れて
いるのだけど、それを表に出すのは苦手。

慣れている人でさえ、時々、あがってしまう事があるくらいだから。

まあ、同じクラスなんだし、これからいくらでも見る機会があるだ
ろう。

ポーと、そんな事を考えていると、彼女の机から化粧ポーチが勢い
よく落ちた。

しかも、蓋が開いていたらしく中身が至る所に散らばった。

私の足元にもアイライナーとグロスが飛んでくる。

「やだ！マジでありえない！」

彼女は、辺りに飛び散っている化粧用品を集めにかかる。

クラスメートたちは自分たちと違う風貌の彼女を遠巻きに見るだけ
で手伝おうとはしない。

そら、見た目、凄いから敬遠もしたくなるよね。

だけど私は彼女に興味があるわけで………というわけで、足元に落
ちていた物を拾うと彼女の元へ行ってみた。

「はい」

あちこちに散らばった化粧品を拾っていた彼女に突然声を掛けた私は、さぞかしチャレンジャーに見えただろう。

まさか話し掛けられると思っていなかったであろう彼女もポカンとした表情で私を見る。

私はその表情とも合わせ、心の中で彼女に悶えていた。

何たる可愛さ！

どちらかといえば、可愛いというより美人に分類されると思うが、今の驚いている表情は可愛い。

前髪を作らず、おでこを出していて、左側のコメカミ部分から緩い三つ編みを編んでいて、そこを桜色に染めている。

ヤンキーメイクをバツチりきめているが、きつと、スッピンもキレイだ。

「はい。こっちに飛んできてたよ」

私は彼女に拾ったものを渡して彼女の反応を観察する。

彼女は、渡されたものを見てから、私に満面の笑顔をくれた。

「ありがと。よく話し掛けたね。あんたみたいなのは私みたいなのは毛嫌いの対象じゃねーの？」

「ううん。毛嫌いなんかしないよ。だって、私、毛嫌いするほど、あんたの事知らないもん」

一瞬、呆気に取りられたような表情をした後、彼女は腹を抱えて笑い出した。

「私が今からあんたを恐喝するかもよ。どーすんの？」

「その時は、盛大に毛嫌いさせてもらうし、自分を守るために何かしらの対処法を駆使させてもらう」

そう言い切ってみたものの内心は、怖い人だったのー！と内なる自分が叫んでるし、私の答えにニマニマし始めた彼女に、だんだんとドキドキとし始めた。なんとなく顔が熱い。

「ふふ。あんた気に入ったわ。名前なんてーの？私は、中野真理・・何あんた、顔赤くない？」

「いややや、今更なんだけど、中野さんの眩しい、え、笑顔にドキドキしてきて・・わた、私の名前！えっと、仁科椿です」

「やつば！あんた可愛いわ！ね、真理って呼んで。椿って呼んで良い？」

「喜んで！」

真理は私の返事に、居酒屋みてーとゲラゲラと笑い声をあげた。それから、私たちは、入学式の為に整列するまで、色々と話した。

出席番号順に並んで体育館に行ったと思う。

新入生入場の時に、私の前にいたのは私に負けない真面目そうな人だったわけで・・・でも、いつの間にか私の横に座っているのは真理。

いつ入れ替わったの？

それよりも気になる所がチラホラあるのだが、聞いてみても良いだろうか？

「ね、真理」

「ん？」

「入学式って在校生も出るものなんじゃないの？しかもね、なんかカラフルくない新入生？」

体育館の中は、両サイドに教師陣と来賓者たち、そしてクラス毎に座る新入生たち。

言葉にただけでは異常は、どこにもない。

だけど、新入生席に座っている人たちの半分が黒くて、その半分の半分が茶系、そして、残りの人たちの頭が、まさに色々という言葉が相応しいぐらいにカラフルなのだ。

あれ、ここって、そこそこの進学校のはずだよね・・・？

「は？なに、椿、何の知識もなくて、この学校に来たわけ？」

「なにかあるのかな・・・？」

「よくお聞き」

私は背筋を伸ばした。

真理は、自身の長い足を強調するように組み直し、コホンとわざとらしい咳をする。

「確かに、ここは進学校です。私も必死に勉強しました。ですが、ここは私立です。入るのは難しいですが、入ってしまえば、年末の進級試験さえパスすれば大丈夫なのです。しかも、2年からは、成績順にクラス分けされるから、そこそこの大学に進学する真面目ちやんたちのおかげで、この学校は進学校と言われるのですよ」

校則はユルユルだしね、と二カつと笑う真理も美しいです。

「と、いう事は、私たちの今の成績は同じくらいってところでしょうか？」

「よく見た目と成績のギャップに驚いていただけます」

と、いう事らしい。

知らなかった。

今住んでいるマンションの近くの学校という理由だけで選んだ学校だったから、こんな愉快な学校だったとは。

でも、そのおかげで真理と会えたって考えると、感謝しか出てこない学校システムだな。

「あ！ 椿、椿、次は、生徒会長挨拶だって！ これは見とかないと損するよ！」

「え、え、なに、何があるの？」

「うふふふ」。私がここの学校を選んだ理由の1つは、あの生徒会長様なんだから！」

さあ、目を限界まで開いて見なさい！と真理から壇上へと顔を向けられた。

教師陣の影から出てきた男子生徒。

その彼が、壇上を中心に立ち、私たちに顔を向けた時、はっ！と体育館の全体が息を呑んだのが分かった。

私も一緒だ。

息も忘れるような美貌とは、こうなのだと初めて知った。

どちらかというと肌が白くて、ここから壇上まで距離があるのも関わらず、黒くて艶やかな髪は天使の輪がキラリと光っているのが分かる。

中世的と表す容姿なのだろうが、アレは中世的と表すには、目と口が妖艶過ぎる。

「なにあの人・・・」

思わず、擦れた声を零してしまった。

中世的な容姿と合わない少し低い声も、全くもって笑っていない目、薄くて赤い唇は目と反比例するようにニコやかだ。

「上条帝さん。私の中学校の先輩だった人。はぁー、相変わらずキレー」

ドキドキする。

好みの異性と出会って高鳴らせるドキドキ感なんかじゃないのは分かりきっている。

あの、得体の知れない雰囲気は、ただただ私の深い部分が【彼は危険】だと、信号を送ってくる。

だけど、一度視界に入れてしまえば、見ずにいられない何かがあつて、上条帝から目が逸らせない。

ボケつとしている間に、挨拶が終り、上条帝が来賓席、教師陣、そして私たち新入生に礼をして頭を上げた瞬間、

「あ」

彼と目が合ったような気がした――

この学校は、ひと学年、6組ずつで構成されている。

受験時の成績を考慮してるらしいクラス分けて3組という事は、私の成績は、真ん中辺りだと思われる。

担任だと紹介された教師は初老に入っただけのおっとりしたおっちゃんだった。

名前は、武智一郎先生。

糸目がなんとも、ほのぼの感を誘う容貌だ。

今日は入学式ということで、授業はなく、後はクラス内の自己紹介が終れば、今日の学校は終わりだ。

これまた、いつの間にか隣の席に陣取っていた真理がツンツンと私の腕を突く。

「ね、ね、学校終ったら暇？」

「なに？」

「んとねー、紹介したい場所があるのさ。私も高校入るまでは、来たらぶつ殺すぞ！って言われてたんだけど、高校に入学したし、どうとうと乗り込んでやる！」

「あー、それって危ない場所じゃない？・・・なに、そのぶつ殺すぞ！発言」

「いやー、中学生の時に行ったら、従兄弟にメンチ切られちゃって、

さ。でも、昨日、確認済みだから、乗り込んでぶつ殺される心配はないよ」

あはははーと笑う真理。

正直、私は笑えない。

終了の挨拶を終えると、真理は私の手を痛いくらいに強く握り、猛ダッシュで学校を飛び出した。

ちよつと、真理さーん！！

待って待って！

あんたの身長、見る限り165以上あるよね！？
10cmの差は激しいと思うの！

あんたの長い足の歩幅と私の歩幅の違いは【月とスッポン】ばりに違いがあるわけで、猛ダッシュする際は、私の回転数が倍だ。

もう、いつその事、コケて猛ダッシュを止めてやろうかと、無謀な事を考え始めた時、やっと真理が歩みを緩めた。

私は息はとんでもない事になっている。

ゼハー、ヒュー、ヒュー

喉から不気味な音が鳴っている。

なんとか、息を整えようと大きく深呼吸を繰り返しているうちに、やっところさ、通常呼吸に戻ってくると、今、自分がいる場所の確認が出来るほどに余裕が出てきた。

飲み屋街ですか？

昼と早い時間帯で開いている店といえば、コンビニに薬局、数件の食べ物処くらいなものである。

「ほら、あその角のクラブがそうだよ」

「はあ、大人のお店ですねー」

「はは。大丈夫だって。あそこ何年も前に廃業していて、中は改造された秘密基地だもん」

「だもんって・・・」

「入店？許可は取ってるし、駄目だったら送っていくから行くだけ行ってみようよ、な！」

「う、うーん。それだったら」

「やった！じゃ行こ！」

とても嬉しそうに笑った真理は、再び私の手を握って歩き出した。

入り口は小さく、ドアの上部に設置されたベルがカランカランと音を鳴らして開いた。

真理の背中ではまだ見えない。
だが、スモークとアルコールの匂い染み付いた空気が室内から流れてきた。

「あー、そのあんだ、ちょっと聞いて良い？ここに中野睦月っている？」

「アア？なんだ、お前。中野さんに何の用があんだよ」

「私はいるかいなか聞いてるわけ、分かる？質問に答えろや」

「アゝアゝ！！」

ひい。真理さん、なにメンチ切ってるんですか？

あなたの背中越しに聞こえる声、めちゃくちゃ怖いんですが・・・
帰っていいですか？

真理は、威嚇に怯む事無く、大股で入室を完了させると、大声で奥
に向かって声を張り上げた。

「睦月いー。いるなら出てこいやーッッ！」

はひい。やーめーてー。

真理の完全なる入室により室内全体が見える。

革のソファと長机がいくつかと、右サイドにスロットルらしきもの。
そして、左側にバーカウンターと2階に上がる階段があるが2階が
どうなっているのかは分からない。

1階の奥には、扉が3つ見えた。

ついでに、室内にいるのは真理と話している人しか、パツと見、確
認出来ない。

ついでのついでに言えば、真理と話している人は、スキンヘッドを
した怖いお兄さんだった。

両手にチリトリと箒を持っていたとしても怖いものは怖い。

「おいテメー、いい加減ッッ」

「アゝアゝ、うるせーよ」

スキンヘッドのお兄さんの言葉を遮るように低い声がかから響いた。声のする方へ視線を向けると、二階から顔を覗かせるイケメンな不良がいた。

「あ、睦月！」

真理の求める【中野睦月】とは彼の事らしい。

紫の髪を緩くリーゼント風にまとめている。

階段から、ゆっくりと降りてくる姿は、中々迫力があつた。

目の前に来た睦月なる彼は、思いのほかデカかった。

長身も高いが、胸板が厚くて、両手を上げてガオーっとか言い出したら、マジでチビってしまうかもしれない。

ワイルド系イケメンというのだろうか、雰囲気全体で【雄】を感じさせる人だ。

あ、だけど、従兄弟って言うだけあって、切れ長の目が真理と似ている。

「おお、真理じゃねえか。お前早速だな」

「だって、ずっと来たかった場所だもん！」

「で？なに騒いでんだよ」

「聞いてよ！このハゲってば、私を門前払いしよーとしたんだよッ」

真理は両手に掃除道具を持つスキンヘッドさんを指差しながら吼えた。

真理の訴えに、睦月は、チラリとスキンヘッドを視線をやると、ハ
アーと大きく息を吐いた。

チラリ視線とため息にビクツと肩を揺らすスキンヘッドは、睦月よ
り凶悪な顔を顔をしているくせに、なんだか猛獣に脅える小動物の
ようだ。

「そら、それがこいつの仕事だし。だいたい昨日言っただべ？ここに
来る前に電話入れるって…ここは通行証がねーと入れない事になっ
てんのよ。もし、俺が来てなかったら確実に門前払い決定してんぜ」
そう言つて、睦月は真理の頭をグリグリと掻き回した。

「ん？」

未だに真理の頭をグリグリとしながら、真理の更に下回る身長の人に
気付いた。

出来れば、影に徹したかった。

目なんか合っちゃった…逸らしたいが、顔が固まって動けない。
今、スキンヘッドさんの気持ち痛いほど分かるよ。

怖いよ。

あんだ、デカ過ぎでしょ。

見上げている形の私の首は、さっきから悲鳴を上げている。

「誰？」

きっと、私と真理の容姿のギャップに戸惑っているのだろう。

何度も交互に私と真理を見ている。

確かに、ヤンキーと真面目そうな子が一緒にいたら不思議に思うで
しょうよ！

「じゃじゃーん！私の高校での友達、第1号の仁科椿ちゃんツツ」

グイグイと背中を押され、睦月の前に押し出された。

うお！

彼の目に視線を合わせなかったら、私の視線つてば、この人の胸辺りなんですけど！

ああ、このままの状態でしたら許されないかな。顔上げたくないな。

だけど、そんな事許されるはずもなく・・・

「これまた、お前と全然違うタイプだなー。中野睦月、テキトーによろしくな」

「仁、仁科椿です」

「はは。ビビってやんの」

そりゃ、ビビりますとも。ビビらずにはおれまい。

睦月はニタニタと笑いながら、私の上から下を眺めると、それは残念そうに言った。

「中の下ってどこかー。まあ、白い肌にそばかすが、可愛いっちゃ可愛いかな。真理の友達だし、声を掛けてくれたら誠意を持ってお手すんよ」

一瞬なにを言ってるの、と？マークが頭の中に回ったが、察するにエッチしたくなったら相手になってやるよ、という解釈で合っていると思う。

何この人！！

処女を捕まえて何を言いさらすの！

「ッけ！結構です！」

純情とは違うけど、耳年増なだけの平凡女にリアルな言葉は毒と一緒だ。

「睦月には勿体ねー子だよ、椿は！相手にするわけないっつーの！」
いやいやいや、実際問題、このイケメンが私を相手にするわけない。
その前に相手してもらいたいわけでは断固ない！

「ほら、お願いされるかもしれないじゃん？」

「はあー、何それ！？するわけないッツ！」

いつまで私の下事情を赤の他人たちに白熱（真理ただけ）されなくてはいけないのだろう。

もう、その話題をやめてもらって良いでしょうか？

私は、未だに変なやり取りをしている二人に対し、目頭が熱くなりそうだった。

「す、すみませんが、その話題は『断固ない』の方向で終わっても
られないでしょうか？」

「そ、残念」

全然、残念そうにしていない睦月だが、変にその話題を引っ張られるよりマシだ。

私の下事情の猥談は私のいない所でこそってやって頂きたい。

いつの間にか、掃除を再開しているスキンヘッドの輝く頭をなんとなく目で追いながら、今度は入学の祝いの口上を述べだした睦月の話に耳を傾ける。

「どうやら、睦月も同じ学校らしい。」

「しかも3年生…詐欺でしょう。年齢詐称詐欺。」

「この顔と雰囲気は、20歳超えても私は納得する。そのくらい大人っぽいのだ。」

「でな、ここを出入り出来るかは、うちの相方の許可がいるわけ」

「え！それって…それって！」

「お前の憧れの王子様。あいつ直々の許可が下りるかどうかは運次第。あいつ気分だけで決めたりするところあるし、あんま期待すんな」

「会えるの！」

「誰？」

「睦月の相方って事は、同じような不良という事ですか？」

「これまた怖いお兄さんが登場したらビビって悪夢を見そっだ。帰りたいなー。」

「駄目かなー、そろーって逃げたら真理、怒るかな。」

「あいつ、上いるぞ」

「ホントに！？会いたい！至近距離で凝視したい！！」

「鼻息を荒くする真理に軽く引きながら、その様子を眺める。」

「大人っぽい外見とは裏腹に、真理は15という年相応にクルクルそ」

の場を回ったり、跳ねたりしている。

可愛い。

真理が、こんなに期待している人ってどんな人なんだろう。

怖いのは勘弁してほしいけど、こんなに興奮されると気になってくる。

決してミィハーではないのよ。決して。

早く、早く！と急かす真理に睦月は、しゃねーなーと苦笑しながら、階段に足を掛け、二階に向かって声を張り上げた。

暫らくシーンと音がなくなったと思ったら、二階からガチャガチャと扉を開ける音が聞こえてきた。

奥から人影が現れたと思ったら、目に飛び込んできた人にピッキンと固まった。

「せい・・・と・・・会・・・長・・・？」

その人は、入学式で垣間見た人だった。

ブレザーの制服をきっちりと着こなしていた麗人が今、ダーク系で纏めた私服に身を包んでいる。

一步一步、階段を下りてくる足取りは優雅で、どこか硬い雰囲気醸し出している。

機嫌が悪いのかもしれない。

「うるさいよ、アホ睦」

「わりいな。これ、真理・・・後・・・」

待った！

待ってください！中野睦月さん！！

この展開だと私の名前を呼ぼうとしているのですか？

私の事は幻だった、もしくはド忘れて下さい、どうか、呼ばないで！

「えーっと、あ、椿だ・・・が、ここへの出入りの許可が欲しいんだってよー。ちなみに、真理は俺の従兄弟で学中の後輩、覚えてね？」

生徒会長は、睦月から真理、そして、私へと視線を流してきた。はあういゝん・・・切れ長の流し目にクラクラします。

そして、やっぱり目が全然笑ってないです、めちゃくちゃ怖いです。視線をなぜ、私で停止させたんですか？

真理、もしくは睦月に視線を戻してください。

「唐突だね」

会長は指を顎に当て、表面上、困ったなといった感じを表している。絶対、困ってないように見えますが、私の目はそれを見ない、見ない見ない。

私が念仏のように『見ない』を唱えていると、真理は会長の前に直立したかと思うと、カクツと90度に腰を曲げ礼をした。

「か、かかか上条さん、お久しぶりです。睦月の従兄弟の中野真理ですッッ。どうか、よろしく願いします！」

ほら、椿も挨拶しな！と、せっつかれ、なぜ私も・・・？と疑問を抱きながらも真理から漂う切羽詰った間に怖じ気付き、真理と同じように礼をとった。

私の場合、斜め45度だった。

「仁科椿です。よろしく願いします」

言葉尻が小さくなったのは許して頂きたい。

だって、会長とばつちり目が合っちゃったんですから！
勘弁してください。

礼をする事で視線から逃れられ、次に頭を上げた時、会長は真理を見ていた。

そして、ジーと真理を見た後、ニコリと笑った。

「ああ、思い出した。君とは会った事あるな、中野真理さん？」

「はい！中学の時に何度か！」

「睦月の従兄弟ね・・・いいよ。通行証やるよ。だけど、条件は1つ」

「なんでしょうか？」

会長はもう1度、ニコリと笑ってこう言いやがった。

ふ、ふざけんじゃねー、クソ会長・・・心の中だけで罵倒させてください。

「そこの椿ちゃん？君の耳、安全ピンで穴開けさせて」

たった5秒くらいで、新しく友人となった女の子に売られました。動揺とか躊躇とか、少しくらい見せてくれても良かったんじゃないかな・・・？

ええ、見せてくれなかったから、今こうなっているわけですが。

私は会長に連れられ二階にいます。

階段を上がり切ると細い通路があり、その奥に扉が2つあった。

1つはトイレで、もう1つは今、私がいる部屋。

簡易キッチンと冷蔵庫、テレビとテーブルとソファや本棚があるし、衝立の向こうには大きなベッドが見え隠れしている。

これはまるで1ルームマンションの一室みたいだ。

テーブルの上のパソコンやベッドに無造作に置かれている衣類を見る限り、ここは会長の私室っぽい。

廃業されたクラブ跡地なはずなのに変な感じ。

今、私の置かれている状況はというと茶色のソファに会長と2人で座ってます。

勿論、すぐ近くに真理も睦月もいるし、そう興味深そうに人の耳を見ないでください。

会長が冷凍庫から取りだとした小さなアイスノンを私自ら左耳に当てさせられている。

断固として拒否したいのに、拒否の言葉も言わせない雰囲気私、ちよつと涙目です。

逃げ出したい。

どんな痛みかなんて想像も出来ない。怖いという言葉しか出てこない。

「耳の感覚がなくなったら言って」

「あ、あのこれって、痛いんですか？」

「痛いよ、専用のピアッサーじゃないからね」

「ややややや、痛いの嫌です」

「安全ピンといっても細いピンだし、血も出ないように、一瞬で終わらせてあげるから安心して」

何を安心するというんだ！

この会長、何がしたいの！私、この人と初対面なのに！！

アイスノンを取り上げられた。

会長が私の耳たぶをフニフニと触っているようだが、感覚を一切感じない。

だけど、とても楽しそうな会長の様子が視界にチラチラと写る。

その手に持っているのは安全ピンでしょうか・・・ひい！

プルプル震えながら覚悟を決めた。

奥歯を噛み締め、汗を掻いている掌をスカートごと膝の上でギュッと握る。

ついでに、力いっぱい目を瞑った。

さあ、来るなら来い！

私のいっぱいいっぱいな様子に、どうも会長は愉快になっているようだ。

耳元でクスクス笑う声が聞こえる。
そして、

「！ツツいつ——ツた——ツツ」

ブチンと何かが切れたような衝撃が来たと思ったら、次に激痛が私を襲った。

「うう……」

「あと少し、我慢して」

今度は、軽いパチンという衝撃。

「終わったよ……睦月、その引き出しに通行証が入っているから取って。真理ちゃんにも渡して」

「い、痛いです……うう……」

終了宣言を頂いて、涙を浮かべた目を開く。

何度かの瞬きで涙が少し頬に流れた。本当に痛かった。

また、クスクスと笑う声が聞こえてきたので、恨みを込めた視線を向けると、意外なほど、穏やかな会長の顔があった。

「頑張ったな。いい子」

「……元はと言えば、会長のせいです」

居た堪れなくなつて、視線を左右に動かしながら、憎まれ口をたたく。

そんなに見ないでもらいたい。

会長は、穴を開けた耳を再び、フニフニと触る。

「だから、褒めてるんだよ」

「うう、嬉しくないです」

いつの間にか感覚の戻った耳たぶへの感触と会長の優しい微笑みに、自分の中で確実に温度が上がったのが分かった。

顔が熱い。

「椿！はい、これが、ここの通行証だつて！」

先ほどまで、睦月と一緒に引き出しに嬉々としてかじり付いていた真理は、あわあわしている私に構う事なく会長の斜め前の1人掛けソファに座った。

なんとなく会長の方に長い足をアピールしているように見えるのは、
・ ・ ・ 間違いないと思う。

グウにした手を真理に突き付けられ、恐る恐る、それを受け取って見た。

通行証は、とても小さかった。

形は、平べったいドーナツの形をしていて赤と青、2種の小さな石が嵌め込まれているピアスだった。

それと、もう1つ。

蛇が林檎を食らっているような形の指輪だ。

「2つ・・・？」

「別に、どっちでも良いんだけど、君たちには特別」

「わぁ！ありがとうございます！！」

真理は会長の言葉に目を輝かせる。

しかも、既にピアス装着済みだし・・・早いよ、真理。

私は、掌の上に乗せたまま、じっと眺めていると、横から手が伸びてきた。

会長だ。

ティッシュを消毒液にベトベトに浸し、私の掌から奪ったピアスを包んで丁寧に拭う。

そして、今度は私の耳も同じように拭い、ピアスを着けてくれた。

「あ、ありがとうございます・・・」

「消毒はこまめにして」

パチンと消毒液の蓋を閉め、汚れた手を洗うために会長は立ち上がって簡易キッチンへと消えていく。

私は掌に残っていた指輪をどの指に嵌めようか思案し、右の中指が1番しっくりくるような気がしたので、そのまま右の中指に嵌めることにした。

今まで、ピアスも指輪した事なんかない。すごく変。

違和感が不思議。とっても不思議。

そつと穴をあけられた耳に触れる。

そこで、先ほど着けられたピアスとは違う違和感に気付いた。何か硬い、これはなに？

「ああ、それはピアッサーであけたピアス。安定するまで外すなよ」

「は？」

そういえば、1回目の痛みの後に、チクって感じの痛みがきた・・・あれって、ピアッサーを使ったってこと？

ピアッサーを持っているなら、最初から衛生に悪い安全ピンじゃなくピアッサーを使って欲しかった。

何だったの、あの激痛。

会長はサディストかもしれない・・・

私は啞然として会長を見た。

なにこの人も意味が分かんない。

何で初対面の人に、こんな仕打ちを受けてんだろうか。私って、もしかして、真理がなんと言おうが、拒否して帰った方が良かったのではないかと思えてならない。

「は——ッッ。腹減った。あいつら帰ってこねーなあー」

睦月の馬鹿っぽい言葉に脱力した。

平和そうで何よりだ。

「あいつらって誰さ？」

「んあ？昼飯を買いに行った買出し班。お前たちが来る少し前に出て行ったんだけど、まだ戻ってこねー」

「だから、あのハゲしか下にいなかったんだ」

「ハゲって真理・・・あれはスキンヘッドといって決して禿げてるわけじゃないと思うんだけど」

「なに言ってるの、椿！あんな、失礼な奴、ハゲで十分だっつーのもう良いよ、ハゲで。後で私は名前を確認しとくから、このままだと私まで、さっきの人の事を『ハゲ』と認識して終わりそうだから。

睦月が、腹減ったーと呟いているのを聞いて、そういえば、まだお昼ご飯を食べていないのに気が付いた。

学校が終わって直ぐに、ここに連れて来られたわけで、お昼ご飯の『お』の字も考えなかった。

でも、気付いてしまえば、段々とお腹が空いてくるわけで。今、お腹の力を抜けば、なんかアホっぽい音が鳴りそうで焦る。

「真理たちは食った？」

「いんや、学校が終わって直ぐ来たから何も食ってねえ・・・椿、そのコンビ二で何か買う？」

「そうだね。買いに行く？」

「だったら、食いきれねえほど、いつも買ってくると思うから、それ食えば良いべ」

「マジで、ラッキー！」

昼ご飯代が浮く、ありがたい申し出に、二つ返事で承諾する真理。私もお昼代が浮いて嬉しい。

内心でウキウキしていると下からガヤガヤとした声が聞こえてきた。どうやら、睦月が言っていた買出し班が帰ってきたようだ。何人いるのか分からないが結構、煩い。

「お、噂をすれば・・・と、行くか」

「わーい、昼ごはん」

スタッと立ち上がった真理は足早に階下へ降りていった。睦月も続いて行く。

私も立ち上がり、それに続こうとした時、軽くスカートの裾を引っ張られるような感じがして振り返った。

その先には、会長がいるだけで、自分のスカートに異変がない。はて？としたが、会長といつまでも二人つきりは恐ろしい。

さっさと足早に出ようとしたが、今度ははつきりと分かるように、手を掴まれました・・・もちろん、ここにいるのは会長と私だけなので、相手は会長だと思います。

「かい、ちょ・・・う？」

振り返って会長を見た。

会長は、何も言わず、手を離し、私の横をスッと横切って言った。
何・・・

残された私は掴まれた手を見詰めた。

その手の中に、銀色の鍵が一つ

に――？

――これはな

何処の鍵で、何のために握らせられたのか分からない。

戸惑う前に、謎だらけで困惑も出来ない——意味が分からない。

私は、その鍵をポケットの中にしまうと階下に下りるために部屋を出た。

下は、初めに入ってきた時のガランとした空間が消え、有線が響いている。

そけだけで、全然違う空間に感じるから不思議だ。

温かみの増した場所は、幾人の人が、ワアワアと騒ぎながら買ってきた物をテーブルに広げていつている。

睦月が言っていたように、確かに信じられないような量の料理を買ってきているようだ。

階下を観察しながら階段を下りて行くと真理は違和感もなく、あの中に混じり、誰かが買ってきたポテトフライを豪快に食していた。

行動早いね、真理。

赤や黄色といったカラフル頭がたくさん。

え、本当にこの中に降りて行けと？

ちよつと、躊躇して階段の中腹で足を止めてしまった・・・内心、

階下はサファリパーク、もしくは、地獄村だと思った。

下りたら終わりだ。

だが、やはり空気に成り切れる筈もなく気付かれるわけで。

「お嬢ちゃん、こつちおいで」

ドレットヘアーのお兄さんに、こつちに来い来いと手を振られる。

わぁ・・・と殻笑いを浮かべ、観念して下りて行こうとした時、階下の一角でガツシャンとテーブルに何かがぶつかる音がした。

なんだ？と、もう一度、サファリパークへ視線を向けると、男が一人、呆然と立っていた。

テーブルに足をぶつけた様で、飲み物が入っていたグラスが倒れて周辺を濡らしていた。

「うわッッ！太一、てめえ、なにやってんだよッ！公平、布巾持ってきて来い！」

近くにいた男がスキンヘッドさんに向かって叫ぶ。

スキンヘッドさんの名前は、公平というらしい、普通の名前だ。

グチグチと文句を言い続ける男を尻目に太一は一步も動かない。

そこだけ、時間が止まったように瞬きさえしない。

いい加減、案山子のように動かない男を不審に思ったのか、男は眉を潜めた。

「・・・太一・・・？」

「き・・・」

「は？」

「椿・・・ツツ椿！！」

叫び声のような大声が室内全体に響く、同時に男が動いた。

ガタガタと物にぶつかりながら、こちらにやってくる男、太一。

私も太一も視線を外す事ない。

目の前に来た太一は、頭一個半、高い身長を丸めるように私を抱きしめた。

有線の音楽だけが室内を支配する。
ガヤガヤした声は一切ない。

「たい兄い・・・？」

「今まで何処にいた。なんで引越した。携帯は繋がらないし、探しても消息を掴ませないってのは、どうなんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんか言え」

「・・・・・・・・ごめん」

「ごめんじゃない言葉が聞きたい」

「俺は、お前たちの関係を聞きたい」

ハッとしてお互いの体を離すと、会長が口だけ笑ってた状態で腕を組んでいた。

怖いです。目がめっちゃくちゃ怖いです。

「みいくん、俺は椿が何でここにいるのか聞きたいよ」

え。

みいくんって、上条帝の帝から取った『みいくん』ですか？
なんて、デンジャラスなあだ名。

私だったら絶対に呼べない。呼びたくもない。

「それは後。まずは説明してくれても良いんじゃない。なんか不愉快なだけど？」

ジロリと睨まれ、私も太一もヒクつと肩を振るわせた。
絶対この人、威圧感だけで人を殺せると思う。
逆らっちゃ駄目。

笑みの消えた会長は能面のように怖い。

否、唇の赤が妖艶で、人間離れして見えた。

私は太一に連れられ会長と対面する形でソファに座る。隣には太一。

「えっと、みいくん、紹介します。妹の椿です」

「太一の妹の仁科椿です」

「え・・・でも、苗字違うくない？太一は桐谷だろ・・・」

近くに座っていた赤髪のお兄さんが的確に指摘してくる。
確かに、私たちは苗字が違う。

「半分だけ。畑違いの妹・・・それよりも椿、お前の話が聞きたい」

「あ——、うー・・・」

「椿」

「お母さんが、」

「孝子さん？」

改めて、言葉にすると、心のどこかで否定していた事が事実なのだと自覚せずにはいられない。

一文字一文字、言葉を紡ぐたびに、見えない刃が私を傷付ける。胸の奥の部分が、痛いと叫ぶ。

「事故で亡くなったの・・・小さい子をね、助けようとして車にね・・・」

「は・・・」

「仕事場の人が葬儀の手続きとかしてくれて」

「なん・・・で、連絡せずに消えた」

「葬儀が終わって、これから、どうしようと思った時に――」

私はそこで言葉を切って、チラリと太一の様子を見た。

太一は、信じられないといった表情のままジッと私を見ていた。この話の続きを話せば、きっと太一は怒る。

「桐谷正造の弁護士と名乗る人が突然現れて、あー、うー・・・今後、桐谷正造の娘だと名乗らないようにと、遺産放棄の誓約書を書かされたの」

「ッんだ、それッッ！」

「別に今までだって関わってこなかったから、そんなもの、どうでも良かったの。それに、ドーンと私名義の通帳2冊と小切手数枚貰って生活も困らなくなったし、ある意味ラッキーかなーと・・・連

絡を切ったのは、ご家族に関わると迷惑がかかるって言われて・・・」

「いくら？親父が椿に渡した額って」

「・・・宝くじが当たったくらい」

ちゃんとした額を言うのを躊躇して濁すように言った。

太一は額に手を当て頂垂れる。

「ハァー。未成年になんつつ額を渡してんだよ・・・」

なんとなくフォローしなくちゃいけないような気がして、私は焦る。

「あ、そこは大丈夫。お父さんの顧問弁護士さんが、ちゃんと管理してくれるらしいし、成人するまでは後見人としてたってくれらしいの」

「当たり前だ！いいか、椿、俺はお前の実兄だぞ。兄弟が会って何処が悪い。兄貴も幸もお前の事、かなり心配している。親父なんて関係ない。あいつの娘だと言わなければ良いだけだ・・・そもそも、桐谷家に関わるなって制約じゃねえだろうが、消えるなバカ！」

「うう、ごめんなしい・・・」

「携帯」

「え」

「携帯出せ」

私はポケットから新しく契約した赤い携帯を太一に差し出した。
太一は、素早く自身の携帯と私の携帯を合わせ赤外線データ交換
し始めた。

その行為が、硬かった空気を和らげるきっかけとなり、まわりにい
た人たちも「俺も俺も」と便乗して、この場にいるカラフル頭たち
もデータを入れていく。

その中に睦月と真理もいた。

あ、そういえば、真理のメアドとか聞くの忘れていた。

携帯が、たらい回しにあっている中、私は、ソファにグッタリと身
を預けた。

太一が、優しく頭を撫でてくれるから、気持ち良くて目を瞑る。

「太兄、ごめんね」

「うん」

暖かく大きな手で何度も何度も撫でられて、なんだか小さな子供に
でもなった気がする。

安心する手。

ああ、まだまだ、自分が子供なんだなって自覚する。

これから、ひとりなのに——ひとりに馴れなきゃいけないのに
情けない。

「椿は、何処に住んでるわけ？」

前方から声。この声は会長だ。

私は、ゆつくりと目を開け、会長を見る。

会長は誰かが買ってきただろうカフェラテに口をつけていた。

あ、私もそれ欲しい。

テーブルの上に置かれた品々から、会長が飲んでいるものと同じものを見付けた。

それを手に取ってストローを挿す。

「学校から歩いて10分くらいの所です。商店街近くの・・・新しく出来たマンションです」

「ああ、知ってる。ね、寂しい？」

「・・・そうですね。1人なのに3LDKの部屋なので」

「そう」

住むなら、この会長の部屋ぐらいが丁度良い。

私の部屋は、ファミリー用だし、それも少しリッチな物件だから、普通の3LDKより広い。

だからか、ふとした時、物凄く寂しい。

人はたくさんいるのに。

誰も私を知らない。

孤独を感じる。

自分から、私を愛してくれた人の前から消えたのに、なんて傲慢な・

目を伏せた私は横から太一にまた、撫でられた。

そして、会長も机をトントンと軽く叩く。もしかして、慰めてくれているのかもしれない。

なんだか、ふっと体が軽くなった気がして笑顔になる。

「椿、寂しいなら私がいつでも泊まりに行くよ！」

真理が、突然私たちの会話に乱入し、苦しいほど抱きしめてくれた。

「私ん家、弟や妹がうじゃうじゃいてさ、匿って欲しーってのもあるんだけどさ」

「うじゃうじゃ？」

ガバッと体を離し、真理はうんざりとした顔をした。

「中2の弟、筆頭に中1に弟、小5の妹に小4の弟、2歳の妹・・・もう、うるせーったらない」

「ふふ、大家族だね」

「だから、時々でいいから匿ってよ」

「いつでもおいで、大歓迎」

「サンキュ！」

これは、真理なりに私を慰めているのか？

なんと、可愛い奴なんだ。

今日が初対面なのに、もうこんなに真理の事が大好きになっている。良い子と友達になった！と自分を褒めてやりたい。

・・・少し前に、ここの出入り認定のために会長に軽く売られたけどね。

携帯が私の元に戻ってきて、改めて昼食会となった。

その時に、ここにいるカラフルな仲間たちの事や会長との間柄を教

えてもらった。

学校の風紀代表と不良の取り合わせが、とにかく違和感しかない。

ドレッドヘアーのお兄さんは、戸田直樹さんといって学校の1学年先輩だった。

ちよつと、童顔で可愛いタイプの人だ。

赤色の髪のお兄さんは、関藍介さん。2学年先輩。

髪をツンツンと立てていて、割合モテる顔付きをしていると思う。

茶髪を無造作にしているのは、古河慶二さん。2学年先輩。
フツメンで人懐っこい印象を受ける。

黒色の髪に緑のメッシュをいれているお兄さんは、伊藤泉さん、同学年。

優しいそうな顔でカッコいい。ちよつとタイプです。

金髪をワカメみたいにパーマをかけているお兄さんは、白井仁志さん、同学年。

ちよつと無口っぽいイケメンさん。

そして、我が兄、太一は天然金髪さん、母方のおばあ様が外国の方らしく見事な隔世遺伝。

甘いマスクが我が兄ながらホレボレする。

太一は、古河さんと同じ超進学校生だ。

会長と太兄、そして、不良たちの関係を教えてもらった。

『一般の人の趣味、素人アーティストの作品』というものに注目した会長。

幼馴染みの睦月と仲間たち、知人を通して知り合ったパソコンに明るい太兄たちと共に、日の目をみない作品、自分売りたいたいと思っていた人たちに、募集をかけ委託販売するネットビジネスを共同で始めたらしい。

最初は、なかなか作品が集まらず、その場に足踏み状態。

それもそうだ。

誰も知らない、それも素人が作った委託通販サイト。実績もない。得体の知れない所に、自分の大切な作品を預けるなんて事、私でもしたくない。

だから、会長たちは一先ず、身近な所のアーティスト、所謂、地元のアーティストを数名ほど口説き落とすのだ。

そして、改めて委託通販サイトを稼働させる。

口コミ、広告、ブログや掲示板で宣伝する事で、徐々にアクセス数が回り始めると、チラホラと作品を買いたいという注文が入る。

素人が作ったものだからこそ『ほぼ1点もの』が多く、それが若者に受けた。

それから――3年。

今では、役1000人を越すアーティストと契約を交わすほどの委託通販サイトになっているらしい。

しかも、このビルの2階は事務所、3、4階は委託された作品を収納しにいららしい。

驚いた事に、通販スタッフは、睦月のチーム……チームってなんだろう？

チームの仲間がバイトとして真面目に働いているらしい。

今度、その現場や作品を見せてくれると言われたので楽しみだ。

それより、気になったのは睦月のチームという発言。

いや、まさか・・・ね・・・

「ね、チームってなんですか？」

「チームはチーム」

「暴走族ってやつでしょうか？」

「いんや、別に俺たちは特攻服とか着たりしねーよ・・・ま、似たようなもんだけどな」

と、言つてニヒルに笑うものだから、ヒクッと太兄にくっ付いてしまった。

「しかも、帝はチームのスポンサー」

睦月は、ニヤニヤ笑いながら会長と肩を組もうとしたが、ひょいと避けられていた。

でも、別に気にした風でもない睦月は話を続ける。

「マシーンを集めるのも酒も居場所も金がないとままならねーしな」

ま、まさか、委託屋さんの売り上げて・・・

どれだけ分かりやすい顔をしていたのか、会長はクスクスと笑い出した。

「株。俺が、こいつらにアシスト金してる出所は、株。」

会長は株をする高校生らしい。

学校では生徒会長をしていて、クラブ跡地の中二階に住んでいて、委託屋さんの運営をし、カラフル仲間とお知り合いで株までする・

全然、上条帝という人となりが見えない。

不可思議な人。

「俺もみいくんに、色々株取引の勉強をさせてもらってるよ」

「太兄も？」

「そ、将来は兄貴の右腕になる身だし、市場の読みは役に立つからな」

太一は会長も尊敬している風に微笑む……ますます、会長が分からない。

私は、チラリと会長を見た。

会長はすぐに私の視線に気付き、来い来いと手招きをしてきた。
なんでしょう……

どうしたらいいのかわからず、その場に留まっていた私の背を太一が軽く押す。

これは、昔からの太一の優しさ。

踏み出せない私の一步と一緒に踏み出してくれる。

私はそろそろと会長の元へ行った。

「あの・・・？」

「座って」

そう言われましても会長・・・再び、あなたの隣に座る勇氣はございませんが？

しかもですね、私、気付いちやっただですよ。

ピアスを開けられている時、嫉妬と羨望を纏った、なんとも言えない微妙な表情で、真理が私たちを見ていたのを――

ああ、真理は会長に恋をしているのだと思った。

この不可思議な雰囲気の人を中学から恋焦がれているのだと。

こんな地味で平凡な女が、今まで近付けなかった憧れの人に、あっさりとは近づく事を許されるなんて、どんな気持ちになるだろう。それが、友達ならなお更だ。

ここは友達を優先するべき！

私は、会長から人1人半離れたソファにちょこんと座った。

それに、ブツと噴出したのは睦月。

苦笑したのは太一。

ドレットヘアの戸田さんと赤髪の関さんと楽しそうに、お喋りをしている真理は私たちのやりとりに気付いていない。

もしかしたら、気付いているのかもしれないが、こちらを見ない。

「な、なんでしょう」

「なんで、そんなに、遠い、わけ？」

私は問いたい。

言葉をいちいち区切ったのは、私に恐怖を与えるためですか？

会長は、私の方に足を組んだ状態で、体を傾け、トントんとソファを指で単調に叩く。

私は、慄いた。

会長は今まで出会った人の中で1番、怖い人なのだと思う。

空気で魅了し、その視線に誘われた獲物を優しく、時には冷徹に捕らえ、その声で獲物を食らう。

私も捕食されそうで――怖い。

「ほら、こっちにおいで、お菓子あげるから」

「な、なんですか！誘拐犯ですか、会長は！」

声が上がったのはご愛嬌。

会長が、テーブルに置かれていたプリンをヒラヒラ揺らす姿に、ムツとした。

「カカカカロリー制限だっしててるんです！お菓子には釣られません！」

元々、少しだけポツチャリ型だった私は、お母さんがいなくなり食生活が偏った。

ショックで動けなかった頃は、食欲もなく、一時的に痩せたけれど、

落ち着いてからは、やっぱりお腹が空いてくるわけで・・・そうすると元々、料理を得意としない私は、コンビニ弁当やジャンクフード、店屋物のお世話になる事になる。

おかげで、高校入学までに3キロは増えた。

家に体重計がないので、正確ではないが3キロは硬いと思う。

自分の腹の肉に危機を覚えた私は、本屋で低カロリーの料理本を買い漁り、毎日、不器用ながらも自炊を心掛ける様になった。最初に比べて、腕前も少しは上がったと自負したい！

「ああ。ふにふに。だしね」

ふにふにで言葉を切った！

私は、ブウと膨れて会長から視線を反らす。
本当に不機嫌になったわけではない、ただ、太っている私を見られるのが恥ずかしかったのだ。
頬が熱い。

「ふふ。膨れて可愛い」

なんて事を仰る！と会長を見れば、顔を反らしていた間に、会長の方が移動していたのか、直ぐ近くに会長の顔がありビックリした。

ち、近い・・・

会長、この近くで拝顔しても毛穴が分かりません。

「ね、椿」

あ、名前。

「睦月のチームの規模は大きい分、敵も多いのを知っておいて。俺の顔も売れている。ここの出入りは気を付けて欲しい。学校でも外でも、この建物外では、俺たちは椿たちを見ない。チームに集ってくる女扱いになるから覚えとして」

どうやら、この人たちはガチで危険人物らしい。

危険と分かっている、それに顔を突っ込むほど無謀ではない。

本当は、今、ここで、会長たちとの繋がりを切って捨てた方がいいのかも知れない。

平凡の象徴である私が唯一、体験した危険。恐怖。怒り。

私がまだ、中学3年だった冬、あのおぞましい体験の出来事以上の危険。

あの皮膚を切り裂く嫌な感触・・・そして、激痛。

それらを思い出すたびに、ゾクリと悪寒が走る。

あの寒い日の出来事。

それは、

——秋の風が吹き出した頃に起こる事件で浮上する事になる——

・・・

切って捨てる事を考えてみた。

瞬時に浮かんだのは、嫌だ！って事だった。

久々に感じた高揚感、本当なら、係り合う事ない人との接点、それを自分から断ち切るなんてしたくない。

と、いう事で、出した結論は、『忠告を胸に刻み付けて、そのよう
に行動する』だ。

「わかりました」

「暇があれば、いつでもおいで。俺がいなくても、」

口の端を持ち上げ小声で、

「鍵で俺の部屋、入れるから」

私にだけに、聞こえるような声で言った会長は妖艶に微笑んだ。

あの鍵の意味。

私と会長は初対面で、鍵を貰うような間柄ではないのに、会長の中でなにがあったのか。

ただの気まぐれなのか、何か意味があるのか？

私が、持つちゃって良いわけがないッッ！

「お返しますッッ！」

「いらなーい」

「な、なんで・・・」

「さあ、なんででしょう」

006-1 (前書き)

お待たせしました・・・

笑って真面目に取り合ってくれなかった会長の鍵は未だに私が持っている。

本当は、こっそりと置いて帰ったのだが、家に帰ったらポケットに入っていた。

鍵を発見した時の戦慄は忘れられない。

その後、暇を持て余した睦月が「倉庫いかね？」と発言した事で、その場はお開きになった。

勿論、倉庫とやらの誘われてしまったが、私は丁重に断った。真理は嬉々として着いて行った。

商店街の裏にある小さなスーパーの値切りタイムが始まる時間が近かったというのが、最大の理由だが、自ら、カラフル集団の溜り場に行って目立つ事もあるまいと思ったのも理由だ。

お昼にカロリー高なものを食べてしまったので、夜は、野菜いっぱい糸こんにゃくメンを作って済ませた。

日課の足踏みステッパーで運動してからお風呂に入る。

乳白色のバスクリンに身を沈め、浮かべた黄色いアヒルを眺める。

「現実なんだろうか・・・」

夢を見ていたんだと言われても信じてしまうだろう。

あの鍵が手元になかったら、今日の事はなかった事にしようという気がする。

「でも、太兄と会えた」

それが、胸をポカポカと暖めた。
もう、会っちゃいけないと思っていた兄と会えた事は嬉しくて仕方がない。

血が半分しか繋がってなくて、所謂、元愛人との子供なのに、会いにきてくれて、ちゃんと妹として愛してくれている。

あの暖かい光とまた、一緒にいられる。

「それは幸せ」

お風呂から上がると、テーブルに置いていた携帯が、着信を知らせるランプがピカピカ光っていた。
それを開けると、

【幸です。太兄さまに聞きました。また、一緒にお買い物が見たいよ】

【朝陽。話は聞いた。このバカが。連絡先を越せ】

「ふ・・・」

他の兄妹からのメールに、涙が出た。
私は、孤独なんかじゃない。

入学して数週間。

会長の鍵は、キーケースにしまったまま使った事はない。

入学して早々、真理はバイトを始めた。

それでも、毎日とは言わないが、暇さえあれば、あのクラブに連れて行かれた。

行くたびに、色々なタイプの人間がいて、彼らの話を聞くのは思いのほか楽しい。

インテリから不良まで豊富だ。

会長とは、会ったり会わなかったりと様々で、階下にいる時もあれば、部屋に籠っていたり、倉庫に行っていたりだった。

会った時は、なぜか隣に座らされ、ペットの如く撫で練り回された。

なんでだろう？

真理に悪いと思って、離れるのに、いつの間にか近くにいます。

毛繕いの如く、髪に櫛を通したり、ピアスを嵌めた耳を引っ張ったり、お菓子を餌付けされたりと・・・私を野生の動物だとも思っているのだろうか？

あの人の行動はかなり突拍子がなく、唐突に、学生メンバーに勉強会を始めたりする。

何処から出して来たのか謎なホワイトボードを使って、本格的な授業を始めた時は、ここは学校なのかと頭を捻ったものだ。

カラフル頭たちに、勉強をさせている姿には、ちよつと感動を覚えたが、怖いので見ない振り。

そして、私が真理と離れた隙について、腰を砕くような艶やかな声で、

「鍵使わないの？」

って、囁くのはやめて欲しい。

しかも、ビクツと肩を震わせる私を見て、してやったり的な顔をするのとは性質が悪いと思う。

1度だけ、真理のバイトがある日に、クラブに行った事がある。

扉を開けた時、怖いお兄さんしかなくて泣きそうになったのは私です・・・すぐに、スキンヘッドの公平さんが私に気付いてくれたので助かった。

厳ついお兄さんを見て、安心したのは初めてだ。

美味しいコーヒーを入れてくれて、まったりと一息ついた時、公平さんとお友達さんと少しだけお話をした。

委託通販の作品を卸に来たという公平さんのお友達さんだが、会長が留守で帰宅待ちの状況らしい。会長がいない。

チリン

と、鍵が鳴った気がしてドキドキした。

ここにいる人は、あの部屋に入る術はない、だけど、私はあそこを開ける術がある。

どこか、非現実的で曖昧だった鍵という存在が、とても怖いと思った。

気が付けば、挨拶もそこそこに飛び出していた。

学校では、目を合わせない。

と、いうか3年の教室と1年の教室では校舎が違っているので、会おうと思っ
て行動しない限り会う事はない。

それでも、食堂や移動教室で見かける事もすれ違う事もある。

だが、絶対に会長はこっちを見ないものだから、空気になったみたい
だなんて思った。

もう1つ。

学校では、睦月たち不良集団と会長の接点は、あるようでない。

生徒会長として接しているようだった。

確かに、不良と生徒会長が仲が良かったら問題にもなるうが、ここ
まで徹底していると感心もする。

ただ、不良共は、授業は多々サボるが、校内では比較的に大人しい。
窓を割ったりとか、直ぐに喧嘩を吹っ掛けたりとかはしないし、
教室がジャングルにもなっていたりはしない。

これは、クラブにいる時に聞いた話だが、会長が生徒会長に就任し
た時に、校内での問題行為を自粛する代わりに、出席日数アウトで
も、年末に特別テストで欠点を免れたら進級出来るように理事長に
取り付けた——というのが、不良たちが比較的に大人しい理由
だ。

これは、会長たちが卒業しても続くように、後輩教育はしっかりし
て欲しいものだ——！！

「ね、ね、ね！」

真理と食堂でご飯（私はお弁当持参）を食べていると声を掛けられた。

「一緒にご飯食べて良いかい？」

いつも、一眼レフの大きなカメラを、まるでネックレスのように首にかけている女の子。
同じクラスの子。

長身で、パツと見、王子様系の男の子みたいな女の子で、いつもスカートの代わりにジャージを履いている。

誰とでも仲良くなるような子だなんていうのが、第一印象。

確か、名前は、大空亜子ちゃん。

「駄目かな？」

「や、いいよ。どうぞどうぞ」

座ってーと、横の椅子を引いてあげる。

大空さんは、テーブルに日替わり定食を置くと、がに股で丸椅子に座る。

「初めて話すよな」

「話し掛けたくてウズウズしていたのだよ」

「ん？」

「君たちには興味があるのさ」

「興味？」

「君たちは気付いているかい？クラスのあの独特な空気を！気付いていないとは言わせないよ。それは君たちが作ったものなのだよ。・・周囲は君たちを苛めつ子とパシリと見ているだろうね。だが、君たちは対等だ。それに、ちゃんと互いを思い遣っているしね。実に、君たちという異色のコンビは見ていて興味深い。ボクは、この異色に混じりたいと常々と思っていたのだよ」

「なんだそれ」

真理は、アコの話に眉間に皺を寄せる。

その顔は、まさに『何言ってるんだ、こいつ』と言っている。

確かに、何言ってるの？って感じがする、むしろ、私に喧嘩売ってるの！って感じのパシリ発言頂きましたが、アコの顔は親愛に溢れていた。

それはもう、君たちと話せて嬉しいって分かる。

「簡単に言つとだね、友達になつて欲しいのだよ！」

そう言つて、エッヘンと胸を張る仕草のアコ。

私たちと友達になりたいという威張ってみせるって・・・
なに、この子。

めちゃくちゃ、面白いですけど！！

「ぶッ」

私が、口を押さえて遠慮がちにクツクツと肩を揺らして笑いを堪えているのに、隣では、テーブルをバンバンと叩きながら大口で笑っ

ている。

そんなに大口開けてると喉チンコ飛んでっちゃうよ？

「大空さん」

「亜子って呼んでくれたまえ」

「アコ。私は椿、こっちは真理・・・こちらこそ、仲良くしてね」

「ここは、握手をする場面だね！」

アコが立ち上がって、自身の服でゴシゴシと手を拭くと私と真理に向いて両手を出してくる。

どんな握手方法だ。

でも、私はその片手をギュッと握る。

反対側では、真理がこれまた、握った手を豪快に振っていた。

ヴヴ・・・ヴヴヴ・・・ヴヴ・・・

ポケットに入っている携帯が着信を知らせるために震えた。

【メール 1件】という文字を見付け、開いてみると『伊藤泉』と表示されていた。

先日、携帯がたらい回しにあった時に、アドレスを交換した人のひとり。

黒髪に緑メッシュで同学年のお兄さん。

アドレス交換したメンバーから、時々、世間話から意味不明な事が書かれた内容が送られてくるようになったのだが、伊藤くんもその1人だ。

この人は私を生きる日記だと勘違いしているかもしれない。

1日あった出来事を何故か記していたりする。

【その男だれ】

は？

その男ってどの男？

って、まさか！

もしかしくなくても・・・外見、王子キャラ、中身、謎キャラのこの大空亜子を男と間違えてますと！！

私はキヨロキヨロと食堂を見回して伊藤くんを探す。

いた。

不良席と呼ばれる一角に白井くんとご飯を食べてた。

「メールかね？」

「あ、うん。メル友から」

「誰？」

「イズミ」

「ほう、メル友！そういうのはしないキャラかと思ってましたぞ」

「キャラって・・・した事なかったんだけど、最近出来たの」

「返事を返さなくていいのかい？」

「うん。パパッとしく」

【新しい友達です】

間違った事は言っていない。

今度、会った時にちゃんと性別を明かしておけば大丈夫でしょう。
男の子だと思っていたら女の子だった！と知った時の伊藤さんの反応が楽しみだ！

あ、でも・・・うん・・・1年の中でも結構、有名（1眼レフを首に掛けているから）なんだけどな。

しかも、イケメンで不良でカッコいいと伊藤くんたちが噂され始めたのが入学して2日目。

それと同じ時期に、王子様なのに女で何故かカメラの不思議さんとアコも噂になってたはずなんだけど・・・他人に興味なさそうだし知らないのかもしれない。

私だって、アコの事を全然、知らなかったら、普通に王子様みたいな男の子だなんて思っちゃうかもしれない。
そのぐらい、アコの見えた目は王子様。

「亜子。なんであんだ、いつもカメラ首から提げてるの？」

あ、それ私も気になる。

入学初日は気付かなかった、アコの1眼レフ、2日目には、カメラを首に提げていて、クラスメイトや校舎、教師たちを撮り捲っていた。

それが、噂になったきっかけだと思う。

アコは、真理の問い掛けに、にんまりと笑った後、1眼レフを持ち上げてカメラにキスを試みせた。

その仕草が、更に王子様のようにアコをカッコ良く見せる。同姓と分かっていても、ドキッとしてしまったと思う。

「これは、ボクの記憶なのだよ。ボクという人間がなにを見てなにを思ったのか、その瞬間を残すものなのだよ」

「わ。なんか、かつけー」

「ふふふ。じゃ、ボクと友達記念に1枚、貰って良いかい？」

私と真理が、くっついてアコに向かって・・・カメラに向かってピースサインをするとアコがカメラを構えてカシャリとシャッター音が1回だけ響かせた。

「本当に1枚」

1枚といいながら、カメラを弄る人は何枚も撮っていたので本当に1枚こっきりで驚いた。

「うん。その瞬間の記憶だからね」

「じゃ、今、アコの記憶に刻み込まれんだね」

私が無気なく言った言葉に、アコがちょっと驚いた顔をした。え。

と、思った次の瞬間には、アコの王子様スマイルが炸裂する。

「本当に興味深い」

昼休みが終わるギリギリまで、食堂でわいわいと3人で話した。その光景が、本当に異色に写ったらしく、食堂から出て行く人々に見られまくった。

そりゃあ、ヤンキーと地味系真面目ちゃんと王子様の取り合わせは見たくなるよ。

いつもは絶対に目を合わさない不良組でさえ、出て行く間に、チラリと視線を寄越したくらいだ。

白井くんに至っては凝視していた。

良いの、そんなに見ちゃって。

午後の授業が終わりを告げる。

今日は、真理はバイトの日だ。

洒落たカフェで、男友達には決して言えない姿でウエイトレスをしているらしい。

らしいというのは、真理の言い分だけなので、本当かどうかは分からない・・・言えない姿ってどんな姿なんだろう？

見に行つていい？って聞いた時、物凄い剣幕で脅された。

『バイト先のカフェーキロ以内に近付いたらミンチ』って・・・ミンチって今どき！？

やっぱり真理は、ヤンキーなのだと思い出したくらいだよ。

いつもは、大雑把な美人さんだから、最近は忘れがちになる。

と、いう事で今日は、クラブに行かずに、まっすぐ帰る日。

「椿はまっすぐ帰るのかい？」

クラスメイトの大半が置き勉していく教科書たちを律儀に鞆にしまっていた私の席へ、タイガー柄のリュックを肩にかけてアコが寄って来る。

真理は既にバイト先へと飛び出していった後だった。

あの子はよく飛び出していく癖があるみたいで、それに巻き込まれる私は正直、いつも酸欠で倒れるんじゃないかと思う。

喉から変な音が出るのなんて、日常茶飯事になりつつある。

「今日はまっすぐ帰るよ」

「では、遊びに行かないかい？」

「どこに？」

「街ブラ？」

「いいよ。あ、けど、5時半には帰らなきゃ」

「おや、何かあるのかい？」

「スーパーのタイムセールがあるの」

と、いうわけで、買い物中です。

商店街の裏にある例のスーパーにてアコと2人夫婦のように寄り添って食材を見えています。

夕方のタイムセールの時間帯は主婦層が多数で、まわりのおばちゃんたちに自分だが、どう写っているのかが何気に気になる。

王子な彼氏に地味な彼女くらいには見えているかも・・・
女同士なんです。

今日のタイムセールス品は、

太刀魚の切り身4切れパック

卵1ダース

牛乳

の3点。

卵・牛乳組と太刀魚組の二手に分かれる。

アコが卵・牛乳の方で私は太刀魚。

いつもは買わない4切れパック、切り身だといっても、1人暮らしに4切れは持て余しちゃうからいつもは買っのを諦める。

冷凍してしまえばいいんだけど、1度でも冷凍してしまえば、身が固くなっちゃうから、出来たら生で調理して食べたい。

そう思うぐらいには私の腕前が上がったと自負している。なんて私凄いい。

しかも今日は、アコを夕食にご招待したし、後の2切れも明日のお弁当で使っちゃえば冷凍しなくてすむ。

「つーばーきー、卵と牛乳を死守してきたよ」

「ご苦労様」

「いやいやいや、夕食をご馳走になるのだから、これぐらい良いのだよ」

「う・・・あまり期待しないで」

「ふふふ、ご謙遜」

ご謙遜じゃないんですが、アコさん。

料理をし始めて2ヶ月弱、腕が上がったっていつても所詮、男の料理的な味付けと豪快な切りっぷり・・・野菜の皮剥きはピーラ使用だし、魚は裁けない。

そんな期待した目で見られても作れるものは高が知れるのだが、その期待に沿えるよう頑張ります！

だけど、今カゴに入れたお菓子代は自分で払ってよね！

買い物を終えて帰宅。

18階建てのマンションの12階に私の部屋がある。

オートロック式の玄関を抜けると郵便受けと警備員なのか管理人なのかいまいち謎なナイスガイの部屋があるエントランス。

もしかすると兼用で雇われているのかもしれない。

よく分からないのはもう1つ、ナイスガイの容姿が金髪碧眼の西洋的容姿だったこと。

この前、玄関前の植木を手入れしているのを遠目で見た時、怪しい外人が花を筆っているようにしか見えなかった。近付くとそれがナイスガイだと気付いた。

あの罪悪感は尋常じゃなかった。しかも、ナイスガイは筆っていたのではなく花の手入れをしていただけだった。思わず、「おかえりなさい」って言葉に対して「ごめんなさい」と返しちゃうぐらいは罪悪感。

そのナイスガイに挨拶をしてエレベーターに乗った私たち。

その間、アコはずっと高そうなマンションだね！と興奮気味にまわりを見ていた。

私も初めてここを見た時はビックリしたなんてもんじゃなかった。母と一緒に住んでいたのは、これとは比べ物にならないくらい、しよばいアパートだったから。

それでも母と楽しい毎日だったのだ。

部屋代は既に支払い済みだったので、実際のここの値段は知らない。名義は私。

ここが私の居場所。

アコは部屋に着いても変わる事はなく興奮していた。

クリーム色のソファに頬擦りをするのはやめて。

なんで、ピンポイントでソファを撮っているの？

私が買ってきた物を冷蔵庫に入れている間ずっと、ソファを撮り続けていたアコは、やっと満足したのかソファに座って改めて部屋を見回し始めた。

「物が少ないのだね」

確かに、物は少ない。

引越する時に、ほとんどの物を捨ててしまったので部屋の大きさと物の量が比例していないのだ。

もともと、ここに引っ越してきた時点でキッチン用品や家電、テーブルにソファは揃っていた。
買い足しはしていない。

三部屋のうちの一室には母の遺品が大切に保管している。母の物は全て残している。

私の持ってきた私物といえば、服と勉強机とベッドくらいだった。

「引っ越してきて3ヶ月だからね。おいおい増える予定だよ。それより、テレビかそこに置いてある雑誌でも観て待って。腕によりを掛けるからね」

「ボクも手伝った方がいいかな？」

「あ、いいいいよ。座ってて」

そう促すと、アコは少しだけ遠慮がちにテレビのリモコンに手を伸ばした。

時間帯が6時過ぎと中途半端って事もあり、今はニュースしか流れていない。

最初はそれを見ていたアコだったが、つまらなかったらしくファッション雑誌を移行したようだ。

私は、テレビから流れるニュースの音とアコが雑誌を捲る音を聞きながら調理を始めた。

作るのは、お味噌汁、野菜いっぱいクリーム煮と今日買った太刀魚に白ご飯。

我ながら完璧な献立だと思う。

まずは野菜を切っていこうと冷蔵庫に入っていたキャベツ、人参、

玉葱、ジャガイモ、ブロッコリーなどをシンクに置いていく。
1つ1つ丁寧に洗って皮を剥いていくものは剥いていく……もち
ろんピュールでだけど。

クリーム煮のキャベツとブロッコリーは大きく切って、お味噌汁の
具は小さく切る。

ザクザクという音を出しながら食材が切れていく。

切っている時のこの音は好きだなっと思っていたら、《ピンポーン
》というインターホンが鳴った。

お客さんが来る予定も荷物が届く予定もなかったので首を傾げてし
まうが、ジッとしているわけにはいけない。

出なければ……正直、めんどくさい。

もう1度、《ピンポーン》と鳴ったので、渋々手を止めた。

多分、めんどくささという顔をしていたらしく、アコが苦笑しながら
立ち上がった。

いや、別に催促したわけじゃないんです。

「いいよ。ボクが出るから続きして」

「よろしく」

インターフォンカメラはキッチンから死角になる所にあるのでアコ
の姿が消える。

だけど、ボソボソという声だけはかろうじて聞こえてくる。

なんだろう……新聞勧誘かな？

勧誘しつこい。

引越してきてから、色々な新聞社からの勧誘攻撃にイライラさせ
られる。

読まないし、お金の無駄だし……一応、パソコンあるから情報に
は困らないもん。

でも、本当に新聞勧誘にしてはアコ遅くない？
勧誘に引っかけてるわけじゃないでしょうね。

「アコー、なんだったのー」

様子を見に行こうと手を洗っているとアコがニコニコと笑いながら
姿を見せた。

「お客さんだったよ」

「え」

お客さん？

だから、お客さんの予定はないんだって。
とうとう、新聞勧誘の人を家に上げちゃったの！？
え、ホント、アコさん、マジで？

「いやはや、驚きだよ、椿」

は？

驚きは私の方だよ。

「まさかのまさかの登場で、さすがのボクも驚きを隠せないよ」

「え、ちょ、なにを言っているの？」

「ふふふ。もうすぐ上がってくるよ」

「アコアコ待つて！なにを言っ・・・」

《ピンポン》

言葉をインターフォンに遮られた。

「あ、来たみたいだね」と玄関へ行くアコを追いかけようとキッチンから慌てて出る。

ガチャリと玄関の戸が開く音が聞こえて、パタパタと走っていく。そこで見たのは、その人を招き入れるアコと、

上条帝

の姿だった。

いつもの黒で固めたファッション。

一瞬、見えなかったけど黒い肩掛け鞆を掛けている。

いつもの妖艶な顔。

全てが漆黒。

啞然とした。

確かに何処に住んでいるのか話していたけど、ここに来るなんて思っ
つてもいなかった。

だってそうでしょう。

ここに居てはいけない人だもの。
ここにいる理由がない人だもの。

「な、え・・・ど・・・て？」

咄嗟で声が出ない。

聞きたい事はたくさん。でも声が出ない。

玄関先に立たせたまんまだった会長は何も言わない家主お構いなしという感じで上がり込んで来た。

玄関脇にあるお客様用スリッパをチラリとも見ない会長に普段スリッパを使う習慣はないのだろう。

私だってスリッパを使う習慣はない。

未だボケつと会長を見ていた私を会長は横切ってリビングに入ってしまった。

ちよつと待つてよ！

追いかけてリビングに入ると何故か普通にソファで寛ぐ会長の姿。アコはそんな会長を激写したくて堪らないのかカメラを触ってウズしている。

「お茶」

「は」

「喉。乾いた。椿、お茶」

「いやいやいやいや、お茶じゃないです・・・なんで!!!!!!」

「椿が来ないから俺が来た、それだけ。ほら、お茶」

「だから、どうしていきなり！」

「鍵使ってくれないし？泉に面白い話を聞いたし・・・まあ、その話は泉の勘違いで終わりそうだけど」

そう言ってチラリとアコを見る。

昼間の伊藤くんとメール、アコを男だと勘違いした事を言っているのだ。

まさか、王子様のアコの話の聞きにここに来たって分けですか？

それで、アコを見て女の子って気付いたって事ですか？

どの角度から見ても王子様なアコをひと目で女の子だと見抜く会長は女の子経験が豊富なんだと思わずにはいられない。

「いやー、椿は生徒会長殿と親しい間柄なのだな」

「ボクは本当に驚いたよ」と笑うアコはいつでもシャッター押せまつせ！のスタンバイOKな状態。

撮る気満々じゃないですか。

のん気に笑うアコに癒されつつ会長から目が離せない。
その会長は魅惑的な微笑をアコに向けた。

「椿がいつもお世話になってます」

なにを仰る！

「大空亜子と申す者です。仲良くしてます」

「うん。これからも仲良くしてやって」

「会長殿は椿想いで優しい人ですね！」

「そう？・・・椿、お茶。それに料理してたんじゃないの。勿論、俺の分もあるよね」

「いや・・・モーあーーーー、いいです。はい」

諦めよう。

なんか会長を追求して納得した答えなんて貰える事なんて出来っこない。

無駄に疲れて終わってしまうに違いない。

2人にお茶を出して調理の続きを始めた。

その間、別に2人はお喋りをするわけではなく、それぞれ雑誌を見たりしている・・・会長、それ女性ファッション誌ですが面白いですか？

・・・うん。妖艶美人と王子様のツーショット。

目の保養です。

もうそれだけでお腹いっぱいです。

でも、目の前には食材。

のろのろと続きに取り掛かった。

対面式キッチンから4人掛けのダイニングテーブルに出来た料理を運ぶ。

一応、上座に会長。

その対面にアコ、その横に私。

お客様用のお箸は用意はない。

今回は割り箸で我慢してもらうとして、今度百円均一にでも買いに行こう。

決して、会長のためではなく、これからも食べに来るだろうアコと真理のための物を買に行こう。

焼立ての太刀魚としめじとキャベツとブロッコリーのクリーム煮に野菜いっぱいお味噌汁に白米。

私の席には白米はなし。夕飯の穀物は2日に1回の割合で抜くようにしている。

体重を気にする乙女は大変なのだ。

「出来ました」

「おお。椿！凄いな。さて、ボクの席は何処だい？」

「そこがアコで、こっちが会長です」

それぞれが席に着いたのを確認して私も座る。

めちゃくちゃ料理に対して称賛の声を上げるアコと対照的に会長は何も発せずジツと料理を見る。

庶民料理で珍しいのかもしれない。

会長のイメーじはフレンチだ・・・この前、コンビに弁当食べてたけど。

「お口に合えば嬉しいです」

「あれ。椿のご飯は？」

「私は・・・なしだよ」

「何故だい？」

「それは、そのね、あのね、えっとね」

「ダイエット？ふにふに気にしてたし」

「ふにふに！！」

やっと喋ったと思ったら、またもや『ふにふに』発言したー！！
会長は、ははと笑ってお箸を握る。

「えー、そうかな？椿は女の子らしくてボクは好きだぞ」

「ありがとう、アコ！」

「別に悪いとは言っていない。ふにふにで可愛いつて言ったの、俺は」

「むう。もう！！いいですから、早く食べちゃって下さい！」

「ふふ。俺、家庭料理って久しぶり」

初めて作った料理だったけど、味付けは丁度良かった。

アコも箸を付けるたびに「美味しい美味しい」と絶賛してくれたし、会長もご飯をお代わりまでしてたくさん食べてくれた。

久しぶりに食卓を囲む時間が本当に楽しくて、母がこの場にはいない事がとても悲しかった――

8時半過ぎた頃にアコがお暇おいとまの声を上げた。だけど、帰宅方法でちよつと揉めた。

徒歩を主張したのはアコでタクシーを推奨したのは私。いくら見た目王子様のアコだって女の子は女の子、まだ8時台だとしても女の子の一人歩きなんてさせられない。

会長がアコを送って行ってくれるのが1番なんだけど、会長は居座る気満々らしくテーブルに自身が持つてきてたらしいパソコンを広げている。

でも、タクシー代がないと主張するアコを黙らしたのは会長でもあった。

「ここは俺が出すから今日は大人しくタクシー乗ってお帰り。椿が心配するから、ね」

鶴の一声だった。

っていうか、口調は柔らかいのには有無を言わせない迫力があつたよな気がする。

渋々了承したアコは私が呼んだタクシーに乗って帰っていった。

帰り際に、会長が家に来た事を真理にも言わないでつて念を押しておいた。

こんな話聞いて嬉しいはずがない。
言うなら、自分の口から言いたいし、今の状況がいまいち理解出来ないしで頭の中を整理したい。

2人つきりになってなんともいえない空気・・・と思っているのは私1人で会長はパソコンをパチパチを弄っている。

手持ち無沙汰な私は、コーヒーを淹れてみる事にした。
私はちよつとだけコーヒーには煩い。

母がコーヒーが好きな人だったから、自然と凝る様になったただけだ
けど。

ガスコンロ式の風船型サイフォンを使っている。
ゆっくりポコポコと入っていくコーヒーの匂いが好きで今では立派な趣味だ。

コーヒー豆専門店の店主のおじいさんおススメの豆を買ったりお喋りと楽しいひと時にもなっている。

自分好みに豆をブレンドしてミルで挽くのも良いが、今日はおじいさんがブレンドして挽いてもらった豆を使う事にした。

ポコ・・・ポコポコ・・・

と音と匂いが広がり出した。

手を動かしながらもチラリと視線をキッチンに向けた会長が、お茶請けを用意している私に微笑みを送っているのに気付かなかった――

「会長、コーヒーどうぞ」

ちよつと大きなカップに注いだコーヒーを少しだけパソコンから離れた場所に置く。

会長はソファに座ったままパソコンを扱い辛いのか、ソファの下、カーペットに座って作業している。

私は、なんとなく会長の背中を見る位置のソファに体育座りのような体制で腰を下ろした。

広い背中。

なんでここに会長が存在しているのだろうか？

「うまいな」

「母が好きだったから自然と淹れるの上手くなったんです」

「いいな、それ」

「？」

「コーヒーから母親が大好きっていうのが分かる」

「ふぉー！」

ぶわつと一瞬にして顔が燃え上がるのが分かった。ついでに、ドツドツと心臓が鳴る。

照れる。照れるから！

そんなにはつきり言われちゃうと照れちゃうから！

「ななな何言ってるんですかッッ！」

「どもってる」

ふいっと顔を反らしてコーヒーをグビグビと飲む。
振り返っていた会長は再び、パソコンを弄り出しているが肩が揺れている辺り笑っているのかもしれない。

「実のところ、何しに来たんですか？」

「・・・んー、椿がイケメンとラブラブしてるって聞いて確かめに来た」

「ざ、残念でした、アコは女の子です！」

「そー、女だった。泉の目は節穴だな。それに、」

再び、振り返って「お前、一人は寂しいって言ってたろ」ってとんでもない微笑をかましてくれた。

「やーめーてー」。

もう、ドキドキが止まらないし、会長の顔なんて見れない。

暖かい・・・

懐かしいほどの幸せを感じて目を覚ました――

息が出来ません。

動けません。

状況が分かりません。

よし、冷静になれ、私。

ここはどこだ・・・私のシングルベッド。シーツは見慣れたリボンとレースが付いた羽毛布団だ。

目の端に映るのはシンプルな勉強机と漫画が詰まっている本棚。

では、この私をガッチリ拘束しているモノはなんだ？

うん。本当は分かっている。

分かっているけど、分かっているんだけど、この状況にどうやってなったのかが分からない。

私昨日、自分でベッドに入った記憶ないんだもん。

それよりも会長がいつ帰ったのかすら知らない。

知らなくて当たり前だ。

だって、会長ここで寝ているもん。

目の前になんてか素肌の会長がいるんだけど、胸板が目の前に迫ってて目のやり場に困る。

なんとなく素肌同士ではないかい？っという足が触れ合う感触・・・確かめるのも怖い。

目の前の胸と頭上からの息遣いから寝ているのだと思う。

ってか、本当にどうして？

カタカタと弄られるパソコン。

コーヒーも飲み終わってから1度トイレに立つただけで、会長はずつと何かをしている。

なにをしているのか聞いても「秘密」と笑っただけで教えてもらえないし、やる事がなくて暇だ。

チラチラ見える画面をからは何をしているのか全然分からなかった。

バラエティが流れるテレビ音と会長が鳴らすパソコン音をボーと聞いている。

静かな時間。

私も会長も喋らなくて、でも、その雰囲気はゆっくりとしていて心地が良かった。

そして、いつの間にか、それらの感じながら眠ってしまった――

――そうだ、そうだったはずだ。

で、会長、なにがあっただんですか？

ガツチリと抱きしめられた状態で動けない。

息も会長にかかるんじゃないかと思うと思うように出来ない。

どうしよう。

今、何時なんだろう？

お弁当作らないといけないんだけど・・・朝ごはんも・・・会長の
も作らなきゃ駄目？

時計を確認したいけど、それを見るには頭上を見上げないといけない。
い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブラインドを閉めた窓から少しだけ光が漏れているという事は夜が明けているって事だ。

いつまでもこの状態でいたら会長が起きてしまうだろう。

それだったら、寝ているうちに行動したい。

そつと頭を動かしてみろ。

下からのアングルの会長にビックリです。このアングルでこんなに綺麗な人っているんだろうか？

シミのない肌、睫毛も長い・・・あ、でも顎の所に傷跡があるって違う、時間だ時間！

6時少し前

いつも起きる時間だった。

このマンションから学校まで10分と近い距離だけど、お弁当を作って朝食作って学校の準備して食べて・・・をしていたらこのくらの時間に起きたので丁度良いのだ。

起きなくては。

会長を見て足からジワジワと離れようと試みた。

そして、寝返りする振りをして会長の腕を解ほどこうとした、だが、外れない。

うむむむと体に乗った腕を持ち上げるように、より力を入れて持ち上げようとしたが、反対に抱え込むように抱きすくめられた。

「わ！ちょッ！」

「なに勝手に起きてんの？」

「！」

寝ぼけた声。

ピッタリとくっ付いてしまった会長の胸と私の頬。

一気に会長の体臭が脳みそを刺激して体がカッチーンと凍った。

「起き起き起き起きッッッ！」

「おはよう、椿。よく眠れた？」

「お・・・おは・・・おは・・・」

「まだ眠い・・・今、何時？」

「え。じ、時間？えっと、あー、6時です...って！会長、離して下さい！」

もう！！

早くはーなーしーて~~~~！！！！

もう心臓が爆発して死んでしまう。そうしたら会長は殺人犯になっちゃうんだからー！

な、なんか、会長の体臭でクラクラしてきたんだけど・・・

これって、俗に言う『フェロモン』ってやつなのでは？

イケナイ花園が見える・・・

も、いつそ二度寝して目覚めたくない気がしてきた。

「あ、やべい。俺、1度部屋に帰らないと制服がない」

「だ、だったら早く離して下さいッ」

ぐいつと会長を押し退けたいが、それをするには会長の素肌に触らないといけない。

そんな破廉恥なこと出来ん！

自慢じゃないが、生まれて17年、異性と付き合った事なんてない！それに今まで母と2人暮らしたわけ、どう転んでも異性と一緒にはベッドに入る機会なんてあるわけないのです！

こんな状況の対処法なんて知らないもん！？

「あゝ、起きたくねえが、起きないとなー」

未だ私を抱きしめたままの会長が渋る。

「もゝ、私はお弁当を作らないといけないんです！退いて下さい！」

「俺のも？」

「余分なお弁当箱なんてありません！」

腕の力を抜いて顔を覗き込んでくる。

うひい！！顔ちかッッ！！

「残念」

「……あ、あ、朝、朝ご飯くらいなら用意します」

「じゃ起きる」

そう言つて会長はさつさと体を離してベッドから出た・・・出た・・・出た・・・

真つ黒なボクサーパンツ1枚の姿、長い足も引き締まった上半身も堂々と晒している。

「うぎゃああああああッッ！！！」

私は会長が出て行つた布団を頭からかぶり丸まった。

「ななななななな！！！！なんちゅー格好をしてるんですか！！！」

「椿のえつち」

「うにいゝゝ！つてか、会長！何でここで寝てるんですかッッ。さ、ささささつさと服着てください」

布団の中で丸まって唸っているとガサゴソという衣擦れの音が聞こえてきたが、聞こえなくなつたと思つたら体に重みを感じた。会長が押し掛かつてるのだ。

「椿も着替える・・・あ、お前昨日、風呂入ってないだろ、入るか？」

会長がいるのに入れと？

そんなの無理ですからッッ！？

私がおもそと動き始めると体を感じていた重みが消えたので布団をかぶつたまま座り直した。

そして、顔だけ覗かせて会長を見上げる。

会長は昨日と全く一緒の黒い姿。

「お風呂入ってたからお弁当も朝ご飯も作れません」

「汚ねえ」

「う！うっちゃい！」

「囃んだ」

「~~~~~！！」

顔を真っ赤にして会長を睨み付けると会長は、ぶはつと噴出し腹を抱えて笑い声を上げた。

「一晩中、抱きしめて寝てたけど良い匂いしたよ、椿ちゃん」

「うぐぐぐ・・・抱き、抱き・・・なんで、一緒のベッド」

「椿の寝顔見てたら俺も眠くなったから。ほら、もう6時15分だぞ、いい加減ベッドから出ろよ」

「だ、だったら部屋から出て行ってください！」

「ああ。昨日、制服を脱がせたの俺だけど？」

そうなのです。そうなのですよ！

私の格好、ブラウス1枚なのです。着ていたはずの学校指定のスカートもカーディガンもタイツのどれも着ていなかった。

その証拠に目の前にあるクローゼットの取っ手部分に制服がちゃん

とハンガーに掛けてある。

死んだ・・・むしろ、永遠に眠らせてくれ。

恥ずかし過ぎてクローゼットの中に身を隠してしまいたい。

再び、布団に潜って丸まっていると会長がポンポンとその上から叩く音がする。

「洗面所借りる。着替えたらご飯作って」

パタンという扉が閉まる音を確認してから布団から出た。

あちこちに飛んだ寝癖を手櫛で整え、着ているブラウスを脱いで新しいブラウスを出す。

だが、それをすぐ着たりしない。

し、下着替えた方が良いかしら？

昨日お風呂は入れていないし、2日も同じ下着は気持ち悪い。

だけど、この家には会長がいるし、洗濯機は洗面所に置いてある・・・

・脱いだ下着を持って会長の前に立つ度胸はないが、ないが、

だ、だけど！！！！

替えないと会長に『こいつ昨日と同じ下着じゃね？』って思われちゃうんじゃない！！

か、替えとこう。

昨日着ていたブラウスに丸めてパツと洗濯機に入れちゃえばいい。

そつと決まれば、下着が入っている引き出しからお気に入りのピン

クレースの上下セットを身に着け制服に着替える。

ブラウスに丸めた下着を胸に抱えるとそと部屋から顔を出してみた。

会長は既に洗面所を使い終わった後らしく、テレビを付けて朝の情報番組を観ていた。

それを確認してから洗面所に駆け込んだ。

下着をササッとネットに入れて洗濯機のスイッチを押して洗面所から出た。

冷蔵庫を開ける。

「会長、和食と洋食どっちですか？」

「んー、和食がいい」

「わかりました」

和食。和食。和食・・・やっぱりここは一般家庭の朝ご飯しかない。まず卵を温泉卵を簡単に作れる機器に入れスイッチオン。

冷凍庫から鮭を取り出し弱火でフライパンに掛け、冷凍保存していた白米を電子レンジに入れる。

次に昨日作ったお味噌汁に水を少し足して暖めて、魚肉ソーセージを刺身のようにスライスして出来上がり。

「会長」

テレビを観ていた会長に呼ぶ。

会長はダイニングテーブルに並べられた朝食を見て不思議そうな顔をした。

「1人分しかないけど？」

「私は、おにぎり1個で十分なんで」

「朝食べないと太るよ」

「分かってるんですけど、朝は食べれないんです！こ、これからお弁当作ります。気にせず食べて下さい」

お弁当はバターロールを包丁で切り目を入れ、レタスとタルタルソースで味付けした鮭を挟んだり、前に作って冷凍しておいたハンバーグを挟んだりジャムを挟んだれと幾つかのサンドウィッチを作った。

それを1つ1つサランラップに包んでランチボックスに入れていく。

よし出来た！！

私はチラリと会長を見た。

会長は1人何が楽しい間か極上の微笑を浮かべ朝食に箸を付けていた。

ま、眩しい！！！！

会長、眩しいです！！！！

私はキラキラ会長のキラキラ光線に死滅させられそうになりながら、おずおずと会長に近付く。

そして、それをテーブルに置いた。

さっき簡単サンドを入れたランチボックスだ。

「お弁当です・・・か、簡単なものなんでいらないういすけ
ど！」

会長はランチボックスを開けて目を見開く。

「すげ」

「じ、自慢じゃないですけど料理は不得意なんです、不味くても文
句言わないで下さいね」

「いやいや、椿さん。昨日も今日のも十分美味かったよ・・・サン
キュ、嬉しい」

ほんの少し首を傾けて微笑む会長にグツときた。

私がアニメみたく鼻血を噴いても今なら許されるような気がする。
っていうか、このドキドキ感を鼻血で表現したいくらいグツときた。

会長が食べ終えた食器を洗っていると『帰る』と食後のコーヒーを
飲み終えた会長が部屋から出て行ってしまった。
なんとも鮮やかな最後だ。

クラスマッチ。

新しくクラスメイトとなった仲間たちと仲を深めようという行事がある。

バスケ

サッカー

バレーボール

ドッジボール

絶対にひとり1つは競技に参加しないといけないが、出たいなら全ての競技に参加しても良い。

私は、めんどくさいと理由で団体戦を選択。それもあまり動かなくとも良い人数合わせか、ベンチに座っている人を狙ってサッカーかバレーにしたかった。

だけど、クラスマッチという”お祭り”に闘志を燃やす真理にアコと2人ドッジボールへ強制参加を強いられた。なぜ。

しかも、ドッジだけ男女混合ってどうなんだ。

痛いじゃないか、最初から外野っていう選択は・・・ああ、ないんですね。

真理さん、内野で戦う気満々ですね、もう私たちも強制決定してました。

「い、嫌だ」

「なに言ってるの、椿！祭りを楽しまなくてどうすんの！」

「祭りって球技大会だよね、これ・・・あう、せめてドッジだけは

避けたかったよ」

「ドッジをやらなくてどーする!」

「いやー」

「ははは、諦めが肝心だよ、椿」

「自分が足手まといの何者でもないと自覚していますう、うう」

「なーに言っちゃってんの、椿のちっこさでコート内を逃げ回るべし!」

「おや、ボクは小さくはないよ」

「亜子は私と一緒に特訓して魔球を生み出すのよ!」

やけに良い笑顔で拳を握る真理が恐ろしい。

球技大会のなにに燃えるのか・・・体の中の不良の血が騒ぐのか？
クラスの中でも、ちょっとヤンチャっぽい人の方がより、わいわいと盛り上がっているような気がする。

やはり、不良の血がそうさせるらしい。

私が強制参加させられたドッジボールは私、真理、アコの他は全員が男子。

やはり女子でドッジを選択するのは稀らしい・・・グズ・・・涙が出そうだ。

今日からクラスマッチまで全体育の授業がその練習になり、いつ

もは6限の授業も5限で終了し放課後練習になるらしい。
テスト期間でもないのに全ての部活もお休みになるあたり・・・
っただけ力を入れてるんだ。

私は体操服に身を包み、コートの隅っぴについていうか、ゴツイ男の子の背
中でガクブルと震えている。

なんか、もうコート内を行き交うボールが魔球です。
マジで当たったら痛そう。

顔って狙ってもアウトにならない場所だよね!?

何でさっきから、顔面目掛けてボールを投げつけあってんの!?!?

「ごおら!?!? 椿、石田の背中から出てらっしゃい!?!?!」

「嫌です~~~~~!?!」

そう言っつて、石田と呼ばれるクラスメイトの背中部分の服をガツチ
リ掴む。

この盾をなくしたら殺られる!?!?!

「石田ー、テメーこの野郎、早く椿を出しやがれ!?!」

「に、仁科・・・?」

真理の迫力に石田くんが戸惑った声を出す。

私はひたすら心の中だけで謝りつつ、裏切られたら困るので背中か
ら手は離さない。

「う、怨むから」

「田中ー、仁科に怨まれるー」

「殺^やんよ、石田」

「殺すつてよ、仁科」

「な、泣いてやる!」

「泣くつて言い出したぞ!!!」

「卑怯だ——!!!」

コートに真理の絶叫が木霊した。

どんなに頑張っても、あの魔球たちの相手は出来ない、秒殺間違いなしに決まっている。

あんなに外野と内野でポンポンとボールが飛び交うなんて!!!

逃げ回れつて無理ですから!?

体力持ちませんから!!!

真理の地獄の特訓から開放されたのは、午後5時。

旧クラブ地・・・会長の根城に今度は連れて来させられています。
で、今、交渉中。

「お願いしますッ」

相変わらずパソコンを弄る会長に真理が土下座する勢いでお願いしまくっている。

本当になにをパチパチしているのか・・・

今、真理が会長に頭を下げているのはアコの入場パスについてだったりする。

私と真理は『あの無情のピアス事件』の賜物で入場パスを入手した、未だに思い出すと耳が痛い。

だけど、仲良くなったアコにはパスはない。

と、いう事は、ここに出入りは勿論出来ないし、簡単にこの事や会長達の事は話せない。つまり、アコには秘密にしなければならぬという事だ。

・・・既にアコは私と会長が知り合いだと知っているのだが。

「友達なんです。良い子なんです。面白い子なんです。迷惑掛けませんからお願いします」

「君たちに友達が増えるたびに許可をあげてたらキリがない。却下」

「そ、そこをなんとかッツ！！！」

ドケチ会長は土下座をするんじゃないかという真理の意見を一蹴。真理の願いも会長の意見の両方理解出来る。どちらに対しても何も言えないし言える立場でもない。

私個人の意見としては、ドケチ会長なのですが・・・

「却下」

「そ、そんなあゝ」

はふーとため息が出た。

私は別に、ここへの出入りに執着はない。

ここは私にとって異世界であり、会長たちは異界人だ。

異世界人たちは真理の意見に興味がないのか見向きもしない。

「別にいいじゃない？」

あ、言っちゃった。

自然と真理と会長の間に入ってしまった。

だって、いい加減このやり取りに飽きちゃったんだもん。

しかも、注目されてしまったし・・・あ、ヤバイ、ドキドキしてきた。

「や、あの、そのですね・・・」

内心、そんな注目しないでーと絶叫していると、パソコンを弄っていた会長が手を止めてこっちを見てきた。しかも、なんか目が怖い。

「あの・・・わ、私がここに通う意味は真理がいるから・・・友達がいるからなんで友達がここに通えないのなら意味はないわけで・・・それに私が通わなくても誰も困らないから・・・その、だから・・・」

そう言いながら、私は会長が開けてくれたピアスを外した。

「お返しします」

テーブルの上にピアスを置く。

真理はポカンとこちらを見て静止、会長の目は更に冷たくなったように感情が見えないし、まわりの人たちも驚愕した表情をしていた。

はて・・・なんで？

「私は、友達優先です。真理とは学校でも会えるし・・・その・・・別にここで遊ばないといけないという理由もないわけですし・・・だったら、ここより私はアコを取ります・・・あの、今までありがとうございました、楽しかったです」

そう言つて立ち上がる。

荷物を持つて周囲に頭を下げる。

その間も真理たちは動かないままだ。そのまま出て行くとしてドアノブに手を掛けた時――

グイッと襟首を引っ張られた。

「グエツ」

一気に首が絞まつて潰れた蛙のような声が出た。乙女台無しだ。ケホケホと咳をしながら後ろを振り返ると無表情の会長がいた。目茶苦茶こわひ。

「なに勝手に自己完結して帰ろうとしてるわけ？」

「は？」

「俺が許すとても？」

「え？」

意味が分からず、ボケつとした顔で会長を見る。傍から見たら立派な見詰め合いだ。

なんとなく目を反らした時点で負けのような気がして反らせない。
長い沈黙。
それを破ったのは睦月だった。

「すっげ、椿、惚れ惚れ（ホレボレ）するわ」

なにが？

どこに惚れ惚れする要素があつたのか聞きたい。

だって、明らかに今のは『友達といたいからさようなら』って言う
ただけじゃんね。

今度は関先輩が笑いながら手を叩き出した。タンバリンを叩く猿の
玩具を思い出してしまった。

「スゲースゲーって。ここのパスが欲しいって輩は数いるわけよ。
けど、つばちゃんにはその価値はないってわけだろ。特に女は俺
たちに近付きたくてウズウズしてっし。ほら、俺良い男だし？」

「はあ・・・」

「特に帝さんと睦月さんは群を抜いてモテるしな」

そりゃ、モテるだろーよ。性格はどうあれ、あの顔でモテない方が
怖いよ、うん。

けど、私と会長たちじゃ何にも生まれないでしょ？

あの極上の男たちと地味で平凡な私じゃ噂にもなれないし、そんな
気持ちにもならないでしょ？

そりゃあ、会長たちに近付けてるかも知れないけど、それでも会長
たちは遠い存在だもん。

憧れるのもおこがましいって感じなんだよね。
だから、彼らは異性人。私とは世界が違う。

「許可する。だから、それハメとけ」

再び、ソファに座らされた私。なぜか今度は会長の隣。
ピアスを掴んだ会長はムスツとしたような声で、私の耳にピアスを付けた。

「え。本当ですか？」

どういう状況の変化なのか？

全然分からなくて横に座る会長を仰ぎ見る。

会長は呆れた顔をしながら私のサイドの髪の毛を引っ張るだけで全然分からない。

この人、人の髪を弄るの好きだな。手癖が悪いのかしら。

「……やったー！！！椿、やったー！！！」

真理がガッツポーズで立ち上がる。

そして、いつかの真理再び、90度の角度のお辞儀をした。
凄い、体育会系！！！！

「……ありがとうございます」

私も一応お礼をと思い髪を掴まれたまま頭を下げると、髪を引っ張られる形になって更に痛かった。

会長はハアーとワザとらしく息を付いて髪から手を離れた。

「指輪」

「は？」

「お前が持っている指輪をその・・・」

「大空亜子ちゃん・・・です」

「その亜子ちゃんに渡しといて。ここの事は秘密厳守」

絶対ワザとだ。

昨日の今日で人の名前を忘れる分けないと思う。

その証拠に、会長つてば、みんなに見えない角度でなんとも言えない妖しい笑顔を頂きました―― -

「なんで、どうしてッッ！！！」

5時過ぎにクラブから帰って、いつものようにタイムセールで安い商品を買って帰宅してみると・・・会長が部屋で寛いでた。意味が分からない。

クラブから出る時にみんなと一緒にバイバイって手を振っていたのを見ましたけど？

その人が何で、家主がいない間にどうやって上がり込んだの！！！！

「椿、無用心過ぎるよ」

「は？」

「玄関に鍵を並べて置いとくのはどうかと思うよ？」

『え』と呟いた私は、荷物を持ったまま玄関に逆戻り。ない。

ないですね、何回見てもないです、はい。

「ちょッッ！！！」

バタバタと再びリビングに戻って会長の前で腰に手を当てて立つ。

「会長、合鍵を持って帰ったんですかッッ！？」

「部屋に入れないでしょ？」

「なぜ!!!」

ここはあんたの家ですか!!!と言ってやりたい、が、その素晴らしい笑顔が怖過ぎて言えませんがね!!!

私は荷物とスクール鞆を置いて、食材たちを冷蔵庫に入れる。

はて、これはまた夕飯をご希望なんでしょうか？

今日のメニューはダイエットスープと雑穀米なんですが、それしか作りませんよ、私。

「ご飯食べるつもりですか？」

「俺に食いつばぐれろって？」

「い、言っておきますが、今日のメニューはダイエットメニューですからね!!」

「そんなにふにふに気にしているの？」

「ふにふに言わないで下さいッ!!!」

「可愛いのに」

「うにゃ!!!」

今、カッと体が熱くなった。

も、この人は私を照れさす天才に違いない!!!

食後のコーヒーを会長となぜか仲良くソファに並んで飲んでます。
美味しいです、テヘ。

私のダイエット食に文句を言わず食べてくれました。
というか、向かい合わせで食べる間が居た堪れなかった・・・会長の動きとか視線がもう、恥ずかしくて食が進まないったらなかった。
あの人、天然の食ストッパーになれると思う。

会長は優雅に飲んでいたコーヒーをテーブルに戻し、ジッと私を見
てきた。
見てきた。

「な、なんででしょうか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんなんですかあゝゝ」

「・・・夕方のアレ、どういう事かな？」

会長はそう言って私の耳のピアスを弄ってきた。
クソ！！！！耳弄られるの気持ち良いじゃないか！！！！ちよつとウツ
トリしてしまいそうで恥ずかしさが倍増ですよ、まったく。
でも、ちよつと痛く弄るのは攻めているんですよね・・・

「だ、だって！！私にとって友達は大切なんです！！」

「ほつ...じゃ、俺はどうでもいいと？」

「ううー」

「唸らず、何か言え」

「だ、だから・・・その・・・私には会長たちは遠い存在なんです」
「こんなに近くにいるのに？」

どこかムツとした会長が私を覗き込んできてヒクッと肩が揺れてしまふ。

美しい顔から不機嫌さが滲み出ていて怖くなったが、今の発言に撤回はない。

本当なもの。会長たちは遠い存在なんだもん。

私はフィと視線を反らして長い会長の足先を見つめて視線を避けた。

「会長、学校で空気みたいに扱っし…会長は人気があるし、私、平凡だし。世界が違うし」

「だから？」

「今なら、今なら良い夢を見たでお仕舞に出来るから」

少し沈黙が続く。

そして、これでもかという長い長いため息を吐かれた。

「前に言っただけ、俺たちは不良の間でも名が通っているし、暴走族とも関わりがある。倉庫に来る女は俺たちに肉欲いっぱい馬鹿女が主だし、これは放置しても問題はない。だけど、椿は違うだろ？クラブに入れる女は数少ない特別。特に力を持たない椿を全面的に守るにはあれが最良だ。これからも態度を変えるつもりはない。それに、学校も結構恐ろしいところだぞ。バレるとヤバイ。グレて

る人間より時には残酷になれるのが一般庶民だったりするからな」

だから、と会長は言葉を切り、

「椿は空気にはなれない。俺の特別だから、お分かり？」

つてか、肉欲つてなんですかー!!!

大人なお言葉に私の目はグルグルですよ!!!

頭を固定して目を反らせないようにされ、その美しい顔が私の平凡顔と数センチの距離に心臓が爆発しそう。

そうそろそろ、止まると思います。

.....どうして？

なにが特別な？

出会ってまだ日が浅いのになにがどう特別になるの？

胸が熱くて、熱くて苦しい・・・

「分かったかって聞いてんの？」

「はい」

会長は私の返事に『よし!』と頭をポンポンと叩いた。

そして、徐に立ち上がった『帰る』と一言残し、またもや颯爽にご帰宅された。

本当に嵐のような人。

会長と関わると、凄い風に晒され、その風を避けようにもどうしたら良いのか分からずオロオロしてしまう。

そのくせ、パツといなくなつて寂しさを置いていく人。

「寂しいな」

静まり返った室内に会長の名残とコーヒーの香り。

それ以外に何も気配がない。

2日続けて感じた他人の温度が愛おしい程、寂しさは倍増だ。

「会長の馬鹿・・・あッ！！！」

会長の悪口を呟いた後、合鍵を回収するのを忘れたのを思い出した。ただ、私の耳にあるピアスと一緒に私たちを繋ぐモノなのかもしれない——「・・・」

って・・・ちよつと待て。

待て待て待て待て、待ってちょうだい!!!

なんで、どうして、どうしてこうなってんの？

昨日の朝と同じ状況、再びな感じで・・・会長に抱き締められながら寝ています。

否、寝てました。

って、違う!!!

昨日、帰る発言して帰りましたよね、会長。

なのに、なんでまた、一緒にベッドで寝ているのでしょうか？

「かかかか会長おゝ!!!」

「ん」

「ん、じゃないです!!! ななななんで!!! はな、離してください」

ジタバタと暴れると昨日と違ってあっさりと離して貰えた。今日はしっかりとパジャマを着用しているのでベッドから飛び降りた。が、布団から覗く会長の上半身が素肌でビビりました。

咄嗟に、捲れていた布団を会長の頭まで覆ってベッドマットに押し付けた。

「なんで裸なんですか! ってか、昨日、帰りましたよね! なんで、

また一緒に寝てるんですかッ!!」

ぎゃあぎゃああと喚き散らしていると布団の中からぐぐもった会長の声が聞こえ、ぎゅうぎゅうと押し付けていた布団から力を抜いた。会長が布団から上半身を起こし、ふぁと小さく欠伸をした・・・その姿も美しいですね。

それに見惚れそうになったけれど、冷静な部分が無駄のない引き締まった素肌に照れを与えてきたのが視線を離した。目が美しさに潰れそうです。

「おはよ、椿」

「おはようござ・・・じゃなくて、なにしてんですか!」

「寝てた」

「そんなの見たら分かります!昨日、帰ったのに、なにしてるんですか」

「荷物取りに帰ってただけ。あ、風呂借りた。それに、1人寝寂しかったんじゃないの?俺が布団に入ったら、椿の方から抱き付いてきたよ。素敵な抱き枕だったろ」

その言葉に、ブワッと全身が焼けたと思った。

それから、クラスマッチまでの1週間、真理との地獄の特訓の成果というか、防衛本能が限界まで磨かれたのか逃げ回るスキルが上がりました。

後、痛みを最小限に押さえる当たり方を習いました。待つな、当たりに行け！だそうです。

各試合、早々に当たりに行って終わってしまいたい。この際、多少の痛みは我慢我慢。

長時間、危険と恐怖に晒されるなんて地獄です！

会長はというと、これまたなぜか毎日のように家に来ます・・・というか居ます。

今日は来なかったなーと、ホっとしたような寂しいような何とも言えない心情に戸惑いつつ就寝した日も、夜が深くなっても全然動く様子のない会長に帰宅を促しても無駄と悟って、仕方がなく自室に鍵を掛けて眠りについた日も・・・朝起きると会長に抱き締められて寝ているのです！！！！

どうやって自室の鍵を開けたの！！！！

怖いよ、会長！！犯罪でしょ、それ！！

もうなんか毎朝、奇声を上げるのは日課みたいになりつつあるのですよ。

1度、会長が来ていない日に玄関にチェーンをして就寝した事があるのだが、真夜中にピンポン連打で叩き起こされ、物凄く不機嫌な

会長に羽交い絞めでベッドに引きずり込まれた事があった。
ショック死するとこだった。

ドキドキし過ぎてクラクラするし、寝られないし、頭上で会長の寝息を聞かせられるし、結局朝まで目がギンギンで寝不足だし、その日のクラスマツチ特訓はしんどいしで、目茶苦茶最悪だった。

今後、チエーンなんて嵌めない。

アレだったら知らない間にベッドに潜り込んでいられた方が断然マシだ。

毎日毎日、続く会長との意味不明な日常。

なんか、もう馴れた！

そう思ってないとやってられない。

そして、この会長との不思議な生活の事をまだ

——真理

特別ってなに？

会長の言う特別が未だに分からなくて、やっぱり遠い存在で、私自身の気持ちもそうだし、私が勝手に思っているだけで本当の真理の気持ちも分からなくて、何もしない今の状況が楽しくて暖かくて、それをやめるには私は弱い。

この微温湯ぬるま湯に浸かっていたい。

だけど、私だって花の女子高生……！

良い年頃の男女が恋人関係にないのに一緒に寝る（就寝という意味

！）など、あつてはならないと思うのです！

これは、回避しなければと思うのですが、今まで寂しかったせいか会長の存在と体温が心地良いし、今まで変な事・・・どうせ、地味で平凡な私に対しそんな気持ちにもならないだろうけど――！！！！変な事も皆無だしと、何かと理由を付けて本当の意味の拒絶が出来ないので。

そして――――クラスマッチ当日。

鬼人・真理の燃え上がる熱気に震え上がっています。

殆どの出場者が男子という競技にも関わらず、男子顔負けの魔球で次々と敗退者を出していく勇士。

片手でボールを鷲掴み、それを振り上げる腕の筋肉がモリモリな感じがして怖さ100倍だし、それが敵方の腹部にめり込んだのを見た時は味方全員でドン引きしましたから！！！！

アコも軽い動きでボールを上手に避けているし、取ったボールは全て真理にパスして魔球製造に協力している。

私はというと、生きる盾・石田くんの背後で蠢いていました。

早めに当たりに行け！精神だったのですが、やっぱり当たるのは怖

いわけで・・・石田くんが当たって外野で出るまではと背後で蠢いているうちに、鬼人の攻撃にで準々決勝までノー外野で生きています。

生きる盾・石田くんも強かったっていうのも幸いしたわけです。痛い思いしなくて良かった！！！！

真理の様子から、なんとなく『そうなのかな？』と思っていたのですが、こういった行事（祭）は、やはりヤンチャな人々が驚くほどの盛り上がりを見せた。

試合毎に野太い雄叫びやワイワイとした雰囲気で、いつもは彼らにビビっている一般生徒たちも盛り上がるし、変な一体感が出る。

見た目、不良で怖い生き物たちのこういうのを見せられると同じ高校生なんだなと思えて嬉しい。

今も3年生の睦月を含む不良たちと1年の不良予備軍クラスの伊藤くんや白井くんたちのチームのドッジ対決に、全学年の女の子たちがキャーキャーと騒いでいる。

ヒートアップする試合内容と比例するように、女の子の黄色い声。

正直、耳が痛い。

無愛想な1年組に対し、睦月のワイルドな愛想振り。

青春漫画顔負けの飛び散る汗、楽しそうな笑顔、学校指定のジャージを着崩す姿、そこから出る魅力的な手足に女子たちはウットリだ。

でも、1年組だって負けていない。

黄色い声に無視状態の伊藤くん、名前を呼ばれるたびに、ペコリと小さく頭を下げる白井くん。

伊藤くんに対して、そんな冷たい貴方も素敵って感じでキャーキャー言っているし、白井くんは白井くんでその反応が可愛いと大絶賛

だ。

私も真理たちと一緒に応援に回っていたんだけど、一般生徒たちが物凄い激しさでキヤーキヤー言っていて、やはり不良組たちはモテルんだな思った。

普通クラスの中でも、ヤンチャな人やスポーツの出来る人の方がモテルし、昔から不良系は憧れの対象でもあるからかな。

それに、荒れ果てた不良校と違って、上条帝会長による調停と秩序があるからか、さらにその傾向が高い。

応援に盛り上がる周囲に耳の限界が近くなった。

キヤーキヤーという黄色い声もそうだけど、隣で野太い声を張り上げる真理が煩い。

『そこだ、殺れ！』と、どちらのチームにも対しても腕も振り回し応援するものだから、いつトバッチリで殴られるのかヒヤとした。痛い思いする前に、サササとその場から離れようとした時、何気にコートを目を向けたら伊藤ちゃんと目がバッチリ合った。

その瞬間、微笑み頂きました！

あまり笑わない人が笑うとその効果は抜群で、一段と周囲の色の黄色が増す。

そして、有名人のステージと一緒に、目が合ったのは私！という主張がたくさんです。

そりゃあもう、怖いくらいに女子たちは熱い。

私だって、伊藤くんは好みの顔なものだからドキドキしましたとも！結局試合は、睦月率いる3年生が勝った。

本当なら、試合毎に間を空けて休憩を取るのだが、テンションの上がり過ぎた3年の睦月チームの要望で、そのまま続けざまに我らのクラスの試合をする事になった。

バゴンツツ

といういい音をさせて、顔面に大ヒットです。

痛い！と感じた次の瞬間には、今度は後頭部にも激痛が走り目が回った。

ツーと鼻辺りから何かが垂れるこの感じ・・・鼻血でしょうか？

視界グルグル、頭クラクラ、起き上がろうにも動けない。

耳元で何か声が聞こえるような気がするけれども。耳もキーンとじていてちゃんと聞き取れない。

あれ？

あれ？

私、これはヤバイのかしら？

内心、ヤバイヤバイと焦っていた時、グッタリとしていた体がフワッと浮いた。

誰かが鼻血を噴いている憐れな私にタオルで顔面をひと目から救ってくれたようだ。

誰のタオルか分かりませんが有り難いです。

一応、乙女なので鼻からダラダラと血を噴出している姿を晒し続けるのは痛い。

フワフワする体。

キーンとする耳鳴りが段々と収まってくると思考も動き出してきた。はて？

今私はお姫様になってらっしゃいます。お姫様抱っこされちゃって

ますよ！！誰に？

物凄く安定した抱っこに力強さを感じるが、今まで体験した事のない足の浮遊感に不安を覚えもする。

ところで、私を抱っこしているのは誰でしょう？

えらい力強い歩きだけど、小太りな私は重くないのか？
ん？

これって、可愛い子がやるから様になるのであって私だと絵柄的に痛くないですか？

私はお腹の辺りでだらんとなっていた腕をソロリと動かして顔を覆っていたタオルを退かした。

否。まだ、血がたたりと垂れていたので鼻にタオルを押さえつける。
うう。盛大な鼻血だな。まだ、止まる様子を見せない。

視界が開けて目をパチパチすると飛び込んできた人物は、

「いしだく…ん？」

大きな体躯をした生きた盾・石田くんでした。

「ごめ…も、だいじょうぶ…だから…おろして」

「そんな呂律が回ってない状態で下ろせるか。保健室まで我慢しろ」

「う…あ。あ、しあいは？」

「俺たち以外は試合してると思うぞ」

「ぬけさしちゃってごめんなしい」

「いや。良いつてサボれるし。で、なんで鼻血噴くことになったわけ？なに見てたわけよ？」

何を見てたかって、そりゃあ・・・

「ま、めちゃくちゃ隣のコートだったけどな」

「うへ」

分かっているならなぜ聞いた！

「隣のコートってバスケットだつたろ・・・なに、仁科も生徒会長に憧れる系？男の俺から見たら、どうかと思うけどなー、あの夢い感じが、やっぱり良いの？弱そうだろ・・・ま、綺麗なことは綺麗だけだよー」

は、は、は、夢い！！！！！！

夢いって言いました、この人？

あの人のどこが夢いっていうの。ゲフ。

あんたこそ、どんな印象を会長に持っているの！！！！よわ、弱そうかあー？あの人、眼力だけで人を射殺するような人だぞ。確かに、綺麗だけどさ！！！！

なんとコメントしたらいいのか・・・

はう、ノーコメントしたいけど、ここで発言しなければ、夢い生徒会長（ぶふ、夢いってどこが？笑える）に憧れている平凡が、生徒会長にウツトリしていて顔面にボールを食らった馬鹿女というレッテルを貼られる！！！！

「ち、ちがうの！！！かいちょうじゃなくてしゅーとみてたによ！！！」

噛んだ！によつてなんだ、自分！！！！

呂律が回らない上に噛んだら駄目でしょ、自分！！！！

「しゅーと。すりーぽいんとかすごいなっておもってたら、ぼーるがかおに……」

私の言い分に、ニヤニヤするだけの石田くん。信じてないな、こいつ！

ムっとした私は迫力のない睨みを石田くんに向けてからタオルを顔に戻して会話を打ち切った。

無言の私の向こうで石田くんの笑い声が聞こえたが無視。

それから保健室にはすぐに着いた。

石田くんは足で、コンコンとノック(?)をして、器用に足で横開きのドアを開いた。

「すみません。怪我人です」

「あらあら、どうしたのー？」

ガタリという椅子から立ち上がる音が聞こえ歩み寄ってくる気配がした。

私はタオルを顔から鼻の位置に移動させ保健教諭を見た。

白髪交じりの可愛いおばあちゃん先生が鼻血塗れの顔にビクリした顔をしたので顔だけで礼をした。

まあ！と口を塞ぎ、おばあちゃん先生は、ベッドの上布団を捲り上げる。

「ここに寝かせて。何があったの？」

「顔面にボールを受けた後、そのまま倒れて後頭部も打ち付けたみたいです」

「大変！」

007-4 (前書き)

お待たせしました (汗)

ベッドに下ろされた私は血で真っ白で清潔なベッドが汚れやしないか心配になった。

おばあちゃん先生は私からタオルを取り上げると鼻血加減を確かめた。

「鼻血は止まっているわね。後頭部は痛い？吐き気とか眩暈はある？」

「はきけ・・・とかはありません。こうとうぶはいたいです」

「氷枕を用意するわね。後、病院にも行きましょ。頭を打っていることだし、ちゃんと検査しましょ。えっと・・・男子生徒くん、彼女のお友達に荷物を持ってくるように伝えてくれるかしら？」

「はい。わかりました」

「ありがと。じゃ私はタクシーを呼ぶわね。あ・・・と・・・担任の先生！誰かしら、あら、やだ。あなたのお名前を聞きたいなかつたわ」

「にしなつばきです。たんにな・・・たけちせんせいです」

「武智先生ね。じゃあ、タクシーが来るまで寝て待っていてね。男子生徒くんもよろしくね」

氷枕を用意してくれたおばあちゃん先生は石田くんを連れて、いそいそと保健室から出て行ってしまった。

あ、ここまで運んでくれたのに、石田くんにちゃんとお礼言えてない。

けど、まあ明日があるし明日でいいかな。

私は、横たわったまま、ボーと天井を見る。

氷枕で冷やされた後頭部のズキズキした痛みが和らいできた感じがする。

保健室に1人ということを手ラリと確認して声を出す。これは、誰かいたら恥ずかしい限りだ。

「あゝ、あーあーあー。痛い。痛い。あー痛い・・・よし。呂律が戻った」

あー、最悪過ぎる。

というか、めちゃくちや恥ずかしい立場なのでは・・・一躍有名人とかになっていたら最悪だ。

たくさんの方がいる体育館で鼻血を噴くってどうなの、私。

絶対、会長に見られた。

ボールが当たった瞬間は見られなくても、鼻血を噴いて倒れて後頭部を強打したところは見られたはず！

しかも、人生は初のお姫様抱っこを見られたのか・・・？

は、恥ずかしい。

「笑われる。絶対に爆笑される」

あの妖艶な顔を意地悪に歪めて笑うんだ、絶対。
今日はもう会いたくないな。

ベッドの上で動かず、内心だけで悶えていたら、廊下からバタバタ

バターという音が聞こえてきた。
うん。

この走り具合は分かるよ。
毎度、爆走させられていたら分かるようになるさ。

バターというドアが開かれる音がして、そこにいたのは、やはり
真理さん。

ツカツカツカと歩み寄ってくるとボケっとしている私を物凄い心配
した顔で覗き込んできた。

「大丈夫？」

情けないほど、頂垂れた真理は今にも泣きそうだ。

「大丈夫だよ。どうしたの真理。泣きそう」

「だってえゝ。だって私が無理やりドッジに誘ったから・・・怪我
した」

「怪我っていつでも鼻血だよ」

「石田から今から病院って聞いたもん」

「一応だよ、一応。そだ、試合どうなったの？」

「仇だ！って頑張ったけど負けた。あ、でも、椿にボールぶつけた
奴は渾身の球をお見舞いしてやったよ！」

「その人…ご愁傷様だね・・・けど、ありがとね。あ、アコは？」

「亜子には椿の荷物を頼んだ・・・椿さ、」

「ん？」

「石田に聞いたんだけどさ、上条さんに見惚れてたからボールに顔をぶつけたってマジ？」

「は？はあ？いやいや違うし！た、確かに会長を見ていたけど、見てたのはシュートだし！決して、見惚れていたわけではない、ないっつ！」

「・・・・・・・・上条さんを好き？」

「だから、違うし！好きっていうなら真理・・・」

「は？あたし？」

しまった！と思っても後の祭り。口を押さえてユラッと視線を反らすと、真理の呆れた風のため息とガタンと椅子に座る音が響く。

「中学の話だし、それ。今は違うし。そりゃあ、今も憧れの対象だけどさ、恋じゃないよ、恋じゃ。しかも今、気になってる人いたりするし」

「え！？誰、私の知ってる人？」

「んー。知ってたり知らなかったり？」

「なにそれ」

「まだ、自分の気持ちがハッキリしてないのよ。あの人の事が本当

に好きって分かったら教えるから待っててよ。だから、私は上条さんに恋はしてないって事で、椿はどうなのって話！クラブでもさ、始終構われているしさ。上条さん的にはお気に入りだよ、椿ってんでえー椿はあ？」

私の気持ちなんて・・・あの会長なんだよ。

あの人と私じゃあ、全然釣り合わないでしょ？

笑いの種の提供になっちゃうじゃないか・・・下手すると哀れまれるかもしれない。

そのぐらい会長は綺麗で人気で遠い人なんだもん。

私のことは気に入ってるって言ってもペットくらいにしか思われてないって！

「好きじゃない。釣り合わないもん」

「なんだ、それ。人を好きになるって釣り合うとかじゃないだろ？気持ちの問題だろうが。私は周りの意見じゃなくて椿の気持ちが聞きたいの！」

「私は・・・・・・・・」

私の気持ち？

上条帝に対する私だけの気持ち・・・？

初めて会長を見た時、本当に綺麗で妖艶で作り物みたいだと思った。次に感じたのは危険な人。近付いては駄目だと思った。

だけど、話してみると、物凄くふてぶてしい人だったし表情も豊かで意地悪でもあった。

変なクラブ跡地に住んでいるし、不良の人たちと実は仲が良かったりと摩訶不思議な人。

いきなり家に来たかと思えば、上がり込むし、人ん家の鍵を勝手に
持ってちゃうし、なんでかベッドに潜り込んでくる・・・けど、そ
の体温はとても暖かくて優しい人。

嫌いじゃない。

だったら好き——？

好き？

好きになって良い人なの？

まだ——自分の気持ち分からないよ

アコが荷物を持ってきてくれた事で、会長に対する自分の気持ちについての考えが中断された。

病院に行くなら体操着より制服のが良いだろうと2人に手伝ってもらって制服に着替えてから、もう1度ベッドに横たわった。

鼻血も完全に止まったり、既に後頭部も痛くない。

後頭部に当たるアイスノンがヒンヤリと気持ちが良いだけで、なんか病院に行かなくていいんじゃない？と試しに言ってみたら2人に怒られた。

はい。大人しく病院行きます。

だから、そんなに睨まないでえい。

何か違う話を！

そうだ！

真理は会長に恋をしていないって言った！

と、いう事はあの事を真理に報告とかしちゃった方がいいんじゃないのか・・・？

この話、衝撃だから、その怖い睨みが止むはず！

「あ、あー、真理様に言わねばならぬ事がありんす」

「口調変」

「だ！だって、真理たちこわひッツ！！！」

「つ・ば・きが悪いんでしょーが。体育館にいた人間の中で『病院行かない』なんてセリフを吐くのは椿くらいよ」

「うむ。今は大丈夫だも後々の安心のために病院には行って欲しいのだよ」

「はい・・・行きます」

「ん。で、言いたいことって？」

「あのですね・・・そのですね・・・だから、あの・・・」

「ハッキリ言う！」

うひー！と肩を跳ねさせた。だって、やっぱり言いにくい。

私は、チラッとアコを見てから真理に視線を戻してゴクリと喉を鳴らしてから覚悟を決めた。

「あのね、会長についてご報告が」

「なに、好きって認めんの？」

「違う！！そうじゃなくて！か、会長が私の家にご飯食べに来るの！！！！それもほぼ毎日！！」

言ってしまった・・・

アコはおやつというように方眉を上げる表情。知っていたから反応は薄い。

反対に真理はというと『は？』という表情をした。

ですよねー、ビックリするよね。

当事者の私だって、未だに意味が分からなくてビックリしているわけだし、いきなりこんな話を聞かされた真理は、もっと意味が分か

らないはずだ。

「何でかは分からないんだけど、ウチん家の居心地が良いみたいで居ついちゃって……」

「居ついたあつて……犬猫じゃあるまいし」

「だって、居るもんは居るんだもん！」

「だもんつて……それつてさ、都合が良いっていうのもあるとは思っけどさ、かなり椿がお気に入りなんだな、ぶっちゃけ好かれてんじゃないの？」

「まさか！それこそペットの如く扱われていますが！」

「ま、これは当人同士の問題だしな。どう転ぶか、転んだ時に分かるだろ」

そう畳み掛けた真理をカツコいいと思った。

会長と関係のないお喋りをしていると保健室の扉が開いておばあちゃん先生が入ってきた。

おばあちゃん先生は職員室にいた武智先生を捕まえて私の怪我の具合と病院への行く旨を伝えると武智先生が車を出してくれる事になった。

真理もアコも付き添うと言ってくれたが、クラスマッチとはいっても一応、授業中なわけで、おばあちゃん先生に却下された。

真理たちと保健室前で別れた時、タオルの持ち主を教えてもらったが驚いた。

あのタオルは伊藤くんのだっらしい。

私がぶつ倒れた時、丁度近くを歩いていたらしい伊藤くんは、鼻血をダラダラ垂らす姿が、あまりにも哀れに思ったのか自身の首に掛けていたタオルを無言で掛けて去って行ったらしい。
後からお礼を言わなければ！！

それから、武智先生の相棒の小さな自動車で学校近くの総合病院に向かったがいいが待たされた。

検査して医者先生の話聞いて、マンションに戻ったら午後2時過ぎ。

学校を出たのが午前中だったから2時間は病院に居た事になる。
ちなみに検査の結果は、『ああ、大きなたんこぶだねー』という笑い混じりの言葉と問題なし！というものでした。
良かった良かった。

医者先生に今日はゆっくり休みなさいと言われたので、制服から部屋着に着替えてベッドに入った。

すぐに、ウトウトとしてきて寝入ってしまった。

次に起きたのは、ポンポンと優しく叩かれる感触と声だった。

目を開くと、ベッドに屈んで覗き込んでくる会長と目がバッチり合いました。

「起きられるか？」

「かいちょ…っ？」

髪を梳かれる様に撫で撫でされる。

あ。気持ち良い。

パチパチと目を瞬いて会長をしつかりと観察すると上着を脱いだ制服姿をしていた。
のそのそと起き上がると会長を見る。

「おかえりなさい」

毒されたか私。

いやいや、寝ぼけているんだな私。

じゃないと、不法侵入な生徒会長相手に何が『おかえりなさい』だ。
会長も驚いた顔をしているじゃないか。

「ああ………ただいま。腹空いてない？」

「お腹？」

「今19時。飯作ったから食えるなら食え」

「え！会長が？」

「一人暮らしが長いからね。必要に駆られて作れるようになる。
どう食える？」

「いただきます」

「じゃあ、用意するから、そのふっ飛んだ髪を直したらおいで」

会長の言葉に、バっと頭に手をやると、確かに左右の髪がスーパーサイヤ人ばりに跳ねていた。
いーやー！ー！

手櫛で髪をどうにか整えてリビングに行くと思卓に雑炊と・・・こ、これは！！！！

コンビ二人気NO.1のスイーツ『フルーツ盛々プリンアラモード

』ではありませんか！？

すぐ売り切れて、ちよつと噂の中で存在するスイーツだと思つていた！！！！

な、なぜ、この素晴らしきスイーツがここに！！！！

私は、それをマジマジ見ながら問う。

ちよつと声が震えたのは感動しているからである。

「か、かか会長、こ、これ！！」

すでに席に着いたいた会長が行儀悪く肘を着いてニヤニヤと笑つて言う。

「お見舞い。それ、知り合いに言つて探させたんだぞ」

その知り合いっていう言葉が、物凄く気になるのですが、今の私は気にしない。

気にしない。

だつて！これ食べたい。

深く考えたら、この素晴らしきスイーツが喉を通らなくなつてしまふ。

「ありがとうございます」

「なーに、俺に見惚れて鼻血噴いたんでしょ？聞いたよ。ま、俺のせいだからね」

ゲフツツ

なにを仰る、お代官！

「ち、違いますー！ー！！たまたまです、たまたま！！！！たまたま横のコートにいたのが会長だったわけで、たまたまスリーポイントする瞬間を見てたらボールが飛んできたんですっ！」

「まあまあ」

そう言つて食べ始めた会長はニヤニヤ顔のまま。

これは激しく誤解をしているな・・・いや、誤解ではないんですが、そこを認めるのはゴニョゴニョ。

私は椅子に座つて会長のお手製の雑炊を口に付けた。

あ。美味しい。

鮭が入ってる。それに醤油の味も濃くもなく薄くもなくて食べやすい。

入っているお野菜も小さく切られていて好きだ。

「会長、お料理出来たんですね」

「1人暮らし長いからね」

「いつから？」

「中1の夏からかな」

「え」

「親は俺が小さい時に死んで、引き取ってくれた祖母様も中1の時

に。それから1人暮らししている。親戚はいるけど、いないようなもんだし。ずっと1人だ」

「会長も寂しい？」

自然と聞いていた。

以前、私に聞いてきた質問。

あれは、いつも会長が感じている事なのかもしれない。

「んー。寂しかった時もあるけど今はそうでもない。睦月たちもいたし、それに今は椿もいる」

「・・・私も」

「ん？」

「寂しくない。今は寂しくないです」

ほんの少し前まで凄く寂しかった。

大好きだった友達と離れることになって、家族だった母を突然亡くし、血が繋がった父とは会った事がなく・・・兄たちは私を家族として愛してくれていたけど私から離れた。

人はたくさん存在しているのに、孤独で寂しかった。

だけど、今は寂しくない。

みんながいるから寂しくない。

兄たちも真理たちも、会長もいるし、毎日がドキドキして寂しいと思う暇もない。

いつも部屋に勝手に入ってくる会長に困っているのも本当だけど、私以外の人の気配に安心するのも本当。

1人の食卓じゃなくてお喋りして食べる食事、夜中に目が覚めた

時に感じる吐息も心地良い。

困るけど手放したくない時間。

私は——この上条帝を好きになっているのかもしれない。

好きになっているのかもしれない。

クラスマッチを終えた翌日、なぜかクラスメイトたちと打ち解けていた。

あの見事な顔面ボールが良かったのか、教室に行くと会う人会う人に労いのお言葉を頂いた。

ってか、半分顔が笑っている気がしないでもない。

私、どんな吹っ飛び方をしたんだろう・・・？

と、首を傾げていたら近くにいた女の子に、私が強制退場した後、顔を真っ赤にして涙汲みながら吼える真理を見て、『あれ、仁科ってパシリじゃねーの？』とクラスの一同が感じたとか。

『なんか面白い』、『なんか取っ付きやすそうじゃね？』、『話しかけてみようか』、『実は気になっていたんだよ』などなどなどという意見が出たとか。

との結果が今朝のこれ。

「仁科ちゃん、大丈夫か？」

「まだ鼻赤くない？」

「昨日の顔面打ち、凄かったね」

「姫抱っこってどんな感じなの？」

今まで話した事もないクラスメイトたちに囲まれ弾丸のようなお言葉に、ちよつとビビる。

元々、人見知りな私は、自分が中心でこんな風に囲まれるとどうしたらいいのか分からなくなるのです！！
たーすーけーてー。

「あ、あの、その」

しどろもどろになりながらも返答しようとするが舌が纏れて言葉にならない。

しかも、そんなに注目するもんだから、顔の中心に熱が集まってく
る感覚が・・・これは絶対に顔が赤くなっているような気がする。

憤死しそうだ!!!

真理たちに助けを求めようと机を見るが、2人共まだ登校してない
みたいで荷物もない。

と、いう事は、ドッジボールに参加した女で今教室にいるのは私1
人となる。

しかもあの2人より話し掛け易いもんだから、寄って集って質問質
問質問!!!!（昨日まで真理のパシリだと思われていましたからね）
ずっと、困惑の顔ばかり返すわけにはいかないから、あーだのうー
だのと唸りつつも、どうにかこうにか返答しようとした時、困惑交
じりのクラスメイトに話し掛けられた。

「仁科ちゃん、なんか2年の先輩が呼んでるよ」

入学したてで2年に知り合いなんているはずもない。

唯一の知り合いというば、3年の会長たちだが、学校では他人宣言
されているって事もあり、話しかけられるって事はまずない。

なんだあゝ？と呼ばれた方へ顔を向けた。

「あ」

知り合いだった。

その人・・・私はその人たちを知っていた。

私は、急いでその人たちの元へ行く。そして、その人たちを見てヘラリと笑った。

「ビックリしたあゝ」

「久しぶり。仁科だよな？」

丸坊主で高身長、ガッチリ体躯の光宗孝則くん。

「仁科ですよ。光宗くん？それに、みゆきちゃんに山内くん？」

「やっぱり、椿ちゃんだった。昨日、体育館で見かけた時、アレって思ったのよ。ホント、久しぶりだね」

フワフワのブラウンのロングヘヤー、アイドル顔の長谷みゆきちゃん。

「えっ。も、もしか、昨日の醜態を目撃した？」

「バッチリ見たぞ。お前、お姫様抱っこで退場してたね。俺、お姫様抱っこってヤツを初めて見た」

ちよっと、チャラつとした茶髪の山内雄二くん。
全員、知っている顔だった。久しぶりに見た顔でもある。

「忘れてください」

「ふふ。乙女の夢を体験しての感想を聞いてもいいかしら？」

「やゝめゝてえ」

「って、いうのは冗談だよ。冗談。本当に懐かしくて会いに来たんですよ。この学校って同中は私たちだけだから、仲間が増えて嬉しいの」

本当に懐かしいとその目が物語っていて私も嬉しくなる。

同級生がどの学校に行ったかなんて、あの時の私は気にする余裕もなく、新しい生活にいつぱいいつぱいだっただけ。

だけど、同級生に会って「懐かしい」と言われると嬉しいな。

3人と目を合わせて、ふふふと馬鹿みたいに笑っていると背後にどーんと重みを感じた。

振り向くと真理がむうつとして張り付いていた。

あら、可愛い。

「ちょっとー、椿、浮気かぁ・・・っていうのは冗談で知り合い？」

「うーんと、同中の同級生？」

「は？」

目をかっぴらいた真理と、はて？と頭を傾げているアコ。

そして、いきなり友好的になったクラスメイトたちがワラワラと集

まってきていた。

なにもそのキョットーンとした面白い顔たちは。笑っていいの、ぷ。

その中の1人がクワッと詰め寄ってくると他の子たちも同じように詰め寄ってきた。

「はぁーなにそれッ、仁科ちゃん！」

「仁科って年上なわけ？」

「は。見えないんだと、むしろ年下」

「ってか、なんで1年なの？」

遠慮がないな、まったく。

しかもなんで、皆、興味津々と目を輝かせているんだろう。

「あーうー、ちょっと受験前に事故ッちゃって」

「事故お？」

「うん。事故った日の次の日が、ちょうど入試の日で・・・まさに試験の時は寝てた」

「・・・・・・お悔やみ申し上げます」

「ふふふ。だから、1年遅れての入学になったのです。ちなみに4月生まれなので、皆より2つお姉ちゃんだったりします・・・お姉ちゃんって呼んで」

少しばかり、サーッと皆のテンションが引いた感じがしたから、ちよっとおどける様に言う。

深刻にしたいくて言ったわけではないのに困る。

別に1年の差なんて、全然違和感がないし、むしろ、年下に見えてるらしいし！

ガクブル・・・ガクブル・・・

あわわわわ！私は今、どうしたらいいでしょうか？このままお家に帰っちゃっていいでしょうか？

でもでもでも！あの制服ってウチの学校のだよね。

夕飯の買い物帰りに重くなったエコバックを肩に掛けてえっちらおっちらと歩いていたら、路地の間から、ドカツ、バキツとか痛い音が聞こえ、見なかったらいいものを見ちゃったら・・・1人相手に3人でボッコボコにしました。

頬を殴られて、血が吹っ飛ぶのをはじめて見たよ。

ああああ。どうしましょう。あれ以上殴られたら死ぬんではないか？

下手に出て行ったら私がボッコボコにされるんじゃない？

でも、ほっておいたらあの人が死ぬんじゃない？

うつわぁー！ー！ー！ー！ー！

女は度胸！度胸だ度胸！

私はガツとポケットに手をつ込んで携帯を取り出した。そして、正義の味方の番号を出し・・・

「そ、その人を放しなさぁー！ーい！ー！ー！」

かつこよく登場は出来ませんでした。

私は、エコバックで顔を隠して携帯を翳す。この時の私の腕力は常軌を逸していたと思う。

「け、けけ警察に連絡しました！今すぐ直ちに立ち去ってください！ー！ー！」

私、いつも思うんだけど、物語やドラマで「警察呼ぶわよ！」じゃ遅いと思うんだけど。だったら、嘘でも警察呼んだって言うほうが得策かと思うんだよね。

ほら。3不良さんも焦ったような声を出して1不良さんから離れた気配だし（顔をエコバックで隠しているので気配だけでお送りします）、物凄く文句を言いながらこっちに来る気配。

ヒイ。身を硬くしていると「どけよツツ！」という罵倒と共に体を突き飛ばされた。

痛い。

エコバックが吹っ飛んで、お尻からコケた。しかも、掌を踏んで行きやがった！

イテエー！ツッ！！

「うっ。イタイ・・・」

掌を擦りながら立ち上がり倒れている1不良さんに近付いた。呻き声を発している辺り気は失っていないようだ。

顔、真っ赤ですが大丈夫でしょうか？

鼻血に歯も折れているようだし額からも血が滴っている。

「ダ、イジヨフダデスカー」

反応ありません。

うーん。どうしましょう・・・私は道端に転がっているエコバックから水を取り出してハンカチに湿らした。

とりあえず顔を拭いてみることにした・・・が、手を弾かれた。イテ！

イラっとなりましたが、何か？

呻いて動けなくせになんですかその態度は。助けたのは自己満足ですがイラっとなりましたよ！

私は、全然開いていた目で睨んでいく1不良さんに持っていた水をぶっ掛けてやりましたとも。文句は聞きません。きーこーえーましえーん。

「傷にバイ菌が入りますよ」

「ッ…！ッゴホゴホ！！」

「動かないで下さい。ちょっと拭くだけですから」

「ッンだ、テメー」

「通りすがりの同高生なだけです」

内心、血まみれの男が怖くて怖くて仕方がありましえん。プルプルと震えている手で傷口を押さえるように拭く。時折、それが痛いのか呻き声が。

とりあえず、血まみれの1不良から、ズタボロの1不良になったとさ。うわっ。ハンカチが真っ赤に染まったぞ、おおい。

このハンカチ気に入ってたんだけどな、これはもう使えないだろうなあ。

改めて1不良さんの顔を見る。見覚えはない。会長とこの秘密基地でも会ったことはないし、学校でも見掛けたことはないはずだ。それにこの人のネクタイの色は2年のものだし。校舎が違っんだし、見たことなくて当たり前か。
ううーん。

「あの・・・中野睦月さんとはお知り合いですか？」

「・・・ンだ、お前！睦月さんの名前をきや・・・ッ・・・イッテ・・・ッイ」

「そうですか。知り合いですね」

この人と睦月が顔見知りだと分かったら後は楽だ。この人を放置す

るのは忍びないけど、ほつとくのも忍びなかったから助かった。警察の番号を表示したままの画面をクリアにすると、登録している番号の中から『中野睦月』を探し出した。あー、電話するの苦手なんだよなあ。しかもこの人に電話するのって初めてだし。むむむむ、と思いながらエイヤ！とボタンを押した。一瞬無音になってから呼び出しの電子音が鳴り始める。この相手が出るまでの時間が苦手だ。

ブツ——と電子音が止まって。

『どーしたあー？』

「あ、あの椿です」

『電話鳴った時点で表示されっから知ってーし』

「あ。そうですね。あの・・・あー、ちょっと待ってください」

受話器を服に押し当てて振り返る。

1不良さんは怪訝な表情でこちらを見ていた。起き上がれないみたいで肩で斜めに向けている。

「あのおー、お名前を伺っても？」

「あ？」

「名前。早く。相手待たせているんですよ」

「伊賀。伊賀良平」

「ありがとうございます」

「お、おい。誰と・・・」

良平と名乗った1不良さんを見無視して電話に向かう。

「お待たせしました。あの伊賀良平さんをご存知ですか？」

『あ？りょーへいー？お前、なんで良平知ってんだよ』

「いやー、何やら西校の不良さんにボッコボコにされている所を発見しまして・・・」

『はあ？？お前無事？お前になんかあると俺が帝に殺されただけど？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・。無事は無事ですが、このボロボロの伊賀くんをどうしたらいいですか？」

『待つてろ。今すぐ迎え寄越すつからよ』

はい。という返事をした後に切って伊賀さんに振り返る。

伊賀さんはいつの間にか体をビルの塀に預けて、こちらを見ていた。パチンと携帯を折り畳みポケットに入れる。そして、エコバックからもう1本水を取り出して伊賀さんに差し出した。

「どうぞ」

それを無言で受け取る伊賀さん。

「誰と話していたんだよ」

「中野睦月さんですよ」

「は」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3415q/>

椿！（仮）

2011年10月1日10時43分発行